福　岡　市

四　箇　遺　跡　群

— 第23次調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集

1989

福岡市教育委員会

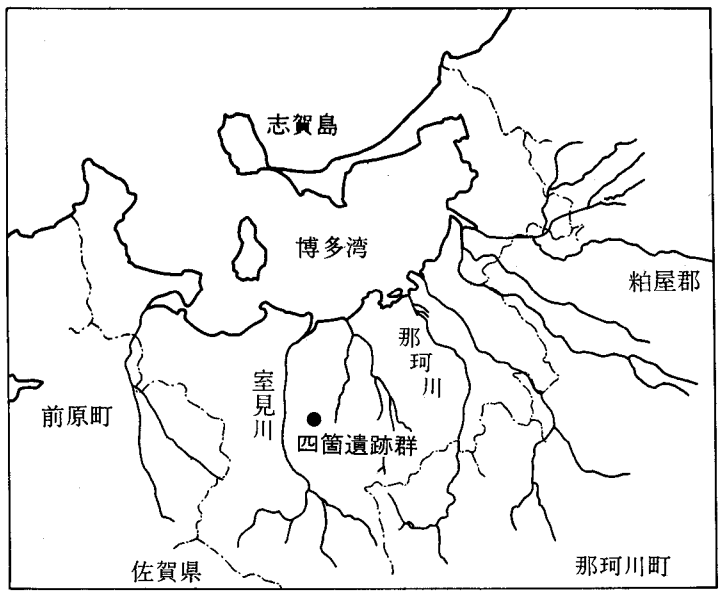
福　岡　市

四　箇　遺　跡　群

SHI　KA

― 第23次調査報告書 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集



遺跡略号　SIK

遺跡調査番号　8744

1989

福岡市教育委員会

序　文

福岡市は今年市政施行百周年を迎えますが、市の発展とともに埋蔵文化財の調査も年々その実績を積み重ね、最近では市民の関心も高まってきているように思われます。

今回報告する四箇遺跡群23次調査地点は早良区重留の水田地帯に位置しており、公園の建設にともなって昭和62年度に調査を行いました。

本書が市民の皆様に広く活用されることを願うとともに、発掘調査・資料整理に関係された方々の御協力に対して深い感謝を表します。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　**佐　藤　善　郎**

例　言

1. 本書は昭和62年11月30日から同63年３月31日にかけて福岡市教育委員会が行った、早良区重留所在の四箇遺跡群第23次調査の報告書である。
2. 発掘調査は、福岡市都市整備局公園建設課が計画した重留西公園整備事業に伴う事前調査として実施した。
3. 出土木材の樹種鑑定は、京都大学木材研究所助教授伊東隆夫氏にお願いし、玉稿を賜った。
4. 遺構・遺物の実測・撮影・製図は調査担当者ならびに調査・整理補助員が行った。
5. 本報告書に関する記録・遺物は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理する予定である。
6. 本書で使用する方位は全て磁北である。
7. 本書の執筆・編集は吉武が行った。

<table>
<tr><td>遺跡調査番号</td><td colspan="2">8744</td><td>遺跡略号</td><td colspan="2">ＳＩＫ　23</td></tr>
<tr><td>調査地地籍</td><td colspan="2">早良区重留字満所</td><td>分布地図番号</td><td colspan="2">084－Ａ－2</td></tr>
<tr><td>開発面積</td><td>2000m²</td><td>調査対象面積</td><td>2000m²</td><td>調査面積</td><td>1700m²</td></tr>
<tr><td>調査期間</td><td colspan="5">1987年（昭和62年）11月30日～1988年3月31日</td></tr>
</table>

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至る経過……1
　2．調査の組織……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……2
Ⅲ．調査の記録……5
　1．調査の概要……5
　2．遺構……7
　(1)SD－21 ……7
　(2)SD－24 ……11
　(3)SD－25 ……11
　(4)SD－26 ……13
　(5)SD－23 ……13
　3．遺物 ……15
　(1)SD－21出土土器 ……15
　(2)SD－24出土土器 ……19
　(3)SD－25出土土器 ……20
　(4)SD－23出土土器 ……21
　(5)その他の土器……26
　(6)石器……27
　(7)木製品……34
Ⅳ．おわりに……34
Ⅴ．四箇遺跡群23次調査河川出土木材の樹種　京都大学木材研究所　伊東隆夫……35

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図　西部Ⅰ　2万分の1）……3
Fig. 2　周辺地形図（1/1000）……4
Fig. 3　遺構配置図（1/300）……6
Fig. 4　SD－21南壁土層断面図（1/80）……8
Fig. 5　1号堰断面図（1/40）……9
Fig. 6　1・2号堰実測図（1/80）……10
Fig. 7　SD－23・22・24土層断面図（1/80）……12
Fig. 8　3号堰実測図（1/40）……14

Fig. 9　SD－21出土土器実測図・Ⅰ（1/3）……16
Fig.10　SD－21出土土器実測図・Ⅱ（1/3）……17
Fig.11　SD－24・25出土土器実測図（1/3）……20
Fig.12　SD－23出土土器実測図・Ⅰ（1/3）……23
Fig.13　SD－23出土土器実測図・Ⅱ（1/3）……24
Fig.14　SD－23出土土器実測図・Ⅲ（1/3）……25
Fig.15　その他の土器実測図（1/3）……27
Fig.16　出土石器実測図・Ⅰ（1/1）……29
Fig.17　出土石器実測図・Ⅱ（1/1）……30
Fig.18　出土石器実測図・Ⅲ（1/2）……31
Fig.19　出土石器実測図・Ⅳ（1/2）……32
Fig.20　出土木製品実測図（1/4）……33
付図　四箇遺跡群23次調査全体図（1/150）

図版目次

PL. 1　1．調査区全景（東から）　2．SD－21全景（東から）
PL. 2　1．SD－21全景（南から）　2．1号堰（南西から）
PL. 3　1．2号堰（南西から）　2．SD－21南壁土層断面（北西から）
PL. 4　1．SD－26南壁土層断面（北から）　2．SD－23上層南半部（東から）
PL. 5　1．SD－23上層中央部（北西から）　2．3号堰（北から）
PL. 6　1．3号堰木製品出土状況　2．SD－23下層全景（南から）
PL. 7　1．SD－23下層杭列（東から）　2．SD－23北壁土層断面（南から）
PL. 8　SD－21出土土器・Ⅰ（1/2）
PL. 9　SD－21出土土器・Ⅱ（1/2）
PL.10　SD－21・24・25出土土器（1/2）
PL.11　SD－23出土土器・Ⅰ（1/2）
PL.12　SD－23出土土器・Ⅱ（1/2）
PL.13　SD－23出土土器・Ⅲ（63以外は1/2）
PL.14　その他の土器（1/2）
PL.15　出土石器（1/2）
PL.16　出土木製品（1/3）
PL.17　四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・Ⅰ
PL.18　四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・Ⅱ
PL.19　四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・Ⅲ
PL.20　四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・Ⅳ

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経過

1984年、福岡市早良区字満所における重留台団地建設の計画が、住宅供給公社から市へ提出された。これを受けた市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）では山崎龍男・田中壽夫を派遣し、6月5～9、26日にわたり当該地の試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。その後、計画用地の一部が市都市整備局の管轄に移り、1987年に重留西公園の建設予定地として浮上した。これに対し、埋蔵文化財課では都市整備局と協議を行い、予定地の発掘調査を行って記録保存をはかることで合意に至った。発掘調査は1987年度に行ったが、予定地の隣接地では民生局老人福祉センター建設に伴う調査（四箇遺跡群22次調査）が行われており、排土処理等の関係からこれの終了を待って着手することとし、11月30日から調査を開始した。途中、悪天候や突発的な緊急調査のために中断することもあったが、翌1988年3月31日に調査を無事完了した。

2．調査の組織

調査委託　福岡市都市整備局公園建設課

調査主体　福岡市教育委員会　　教育長　佐藤善郎

調査総括　埋蔵文化財課長　　柳田純孝　　埋蔵文化財第一係長　折尾　学

調査庶務　埋蔵文化財第一係　　岸田　隆

調査担当　埋蔵文化財第一係　　松村道博・吉武　学

調査補助　山口満・池田光男　　**整理補助**　入江のり子・藤尾純江

調査作業　太田孝房・尾崎達也・鬼丸邦宏・榊　太郎・柴田大正・平田信吉・藤吉浩次・大内文恵・尾崎八重・金子ヨシ子・清水文代・正崎由須子・杉村文子・典略　初・西嶋タミエ・西嶋初子・西納テル子・西納トシエ・平田政子・平野ミサヲ・真名子ユキエ・山下サノエ・吉岡アヤ子・吉岡員代・吉岡竹子・吉岡蓮枝・脇坂ミサヲ

整理作業　有吉千栄子・上田保子・太田順子・緒方まきよ・桑野正子・古賀陽子・藤崎もと子・清水紀子・中牟田礼子・南里三佳・林由紀子・平野志津江・丸山信枝

なお調査期間中、磯　望氏（西南学院大学）に河川の土層についての貴重な御教示を受けた。また、河川出土木材の鑑定を伊東隆夫氏（京都大学）にお願いした。

II. 遺跡の位置と環境

四箇遺跡群23次調査地点は福岡市早良区重留字満所に所在する。1976年発刊の「福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）」では遺跡の範囲を外れているが、試掘調査によって遺構の存在が確認されたため、新たに四箇遺跡群の中に追加された。

遺跡の位置する早良平野は、室見川を中心とする河川の沖積作用によってその大部分が形成されており、平野内には幾つもの微高地が生成され、多数の河川が埋没している。23次調査地点周辺の四箇遺跡群[注1]や田村遺跡群[注2]で行われた調査では、これらの微高地部を生活基盤とし、河川を中心とする低湿地部に生産基盤を求めるという状況が一様に見られ、平野低地部の遺跡ではこの様な立地が一般的なものであることを物語っている。本調査地点の立地もこれと同様の状況を示してはいるが、ここでは微高地部は既に削平を受けており、旧河川のみが検出されるという状態であった。遺跡の現状は水田であり、遺構面の標高は海抜21mであった。

周辺地域で行われた既往の調査には、前記の四箇遺跡群、田村遺跡群の他に重留遺跡群[注3]で現在調査が継続中であり、本報告と関わりのある弥生時代・古墳時代の遺構について見れば、四箇遺跡群で弥生時代の集落、溝と杭列、甕棺墓、古墳時代の水路と杭列が、田村遺跡群で弥生時代の河川と堰、甕棺墓、古墳時代の集落が、重留遺跡群で前方後円墳（拝塚古墳）などの調査がそれぞれ行われている。また東方の油山西側丘陵においても、弥生時代の甕棺墓を主体とする野芥岩隈遺跡の調査[注4]、油山群集墳の踏査、影塚古墳[注5]・山崎古墳群の発掘調査[注6]などが行われている。

注

1．福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書」　(1)～(5)　1976～1982

　福岡市教育委員会　「四箇遺跡」　1987

2．福岡市教育委員会　「高柳遺跡」　1981

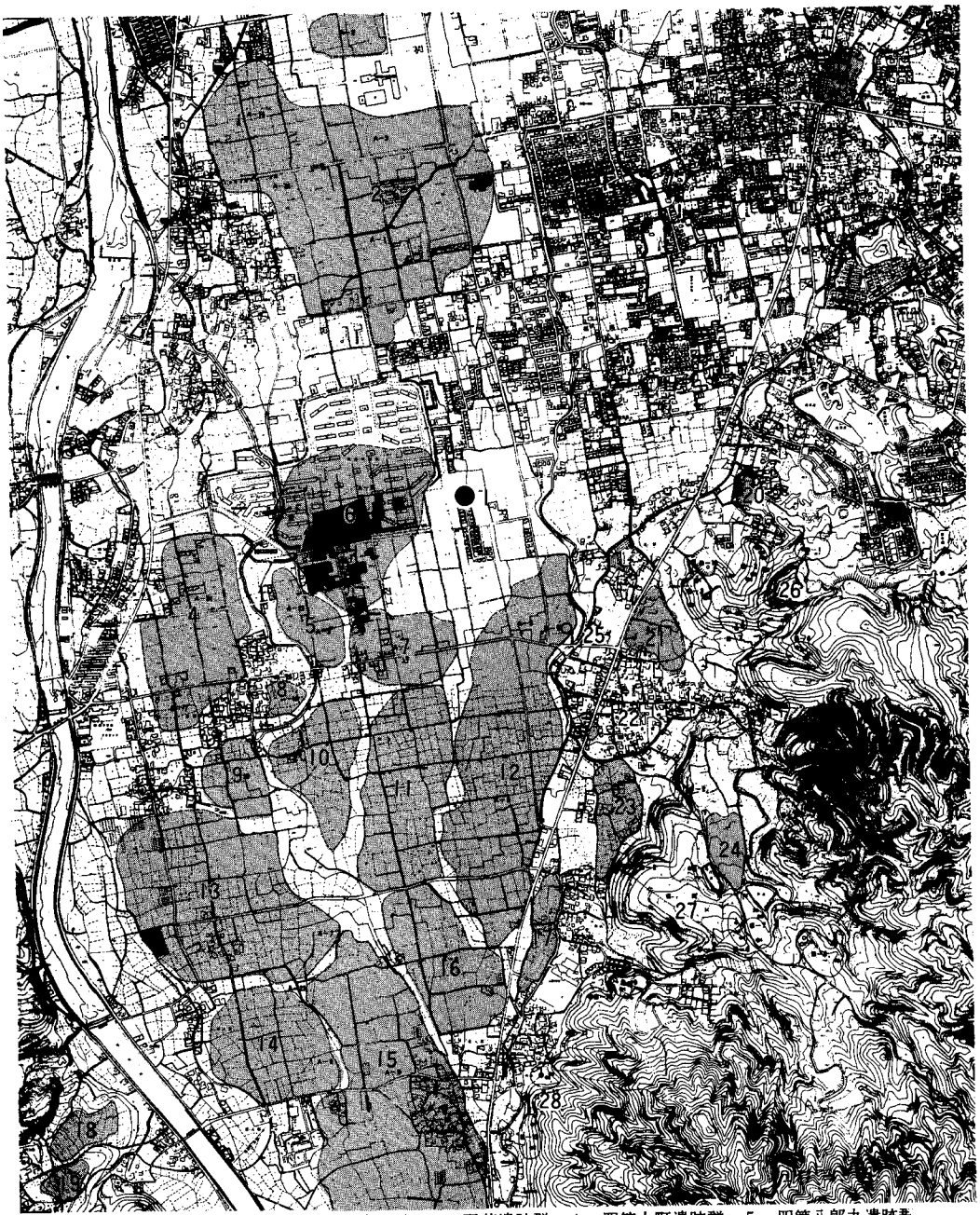
　福岡市教育委員会　「田村遺跡」　Ⅰ～Ⅴ　1982～1988

3．圃場整備事業に伴い1987年から緊急調査継続中

4．宅地造成に伴い1985年度に緊急調査

5．福岡市教育委員会　「福岡市影塚第1号墳発掘調査報告」　1972

6．1974年大川清氏調査　報告書未刊　（福岡市立歴史資料館　「福岡平野の歴史」　1977）



1．四箇23次調査地点　2．田村遺跡群　3．野芥遺跡群　4．四箇大町遺跡群　5．四箇八郎丸遺跡群　6．四箇遺跡群　7．四箇東遺跡群　8．四箇園田遺跡群　9．辻の前遺跡群　10．四箇古川遺跡群　11．四箇船石遺跡群　12．重留遺跡群　13．清末遺跡群　14．安通遺跡群　15．東入部遺跡群　16．岩本遺跡群　17．ヒワタシ遺跡群　18．黒塔A遺跡　19．黒塔B遺跡　20．浦田甕棺遺跡　21．重留村遺跡群　22．重留辻遺跡　23．熊本遺跡群　24．古田遺跡B地点　25．拝塚古墳　26．重留古墳群　27．三郎丸古墳群　28．荒平古墳群　29．山崎古墳群(消滅)

Fig. 1　周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図　西部Ⅰ　2万分の1）

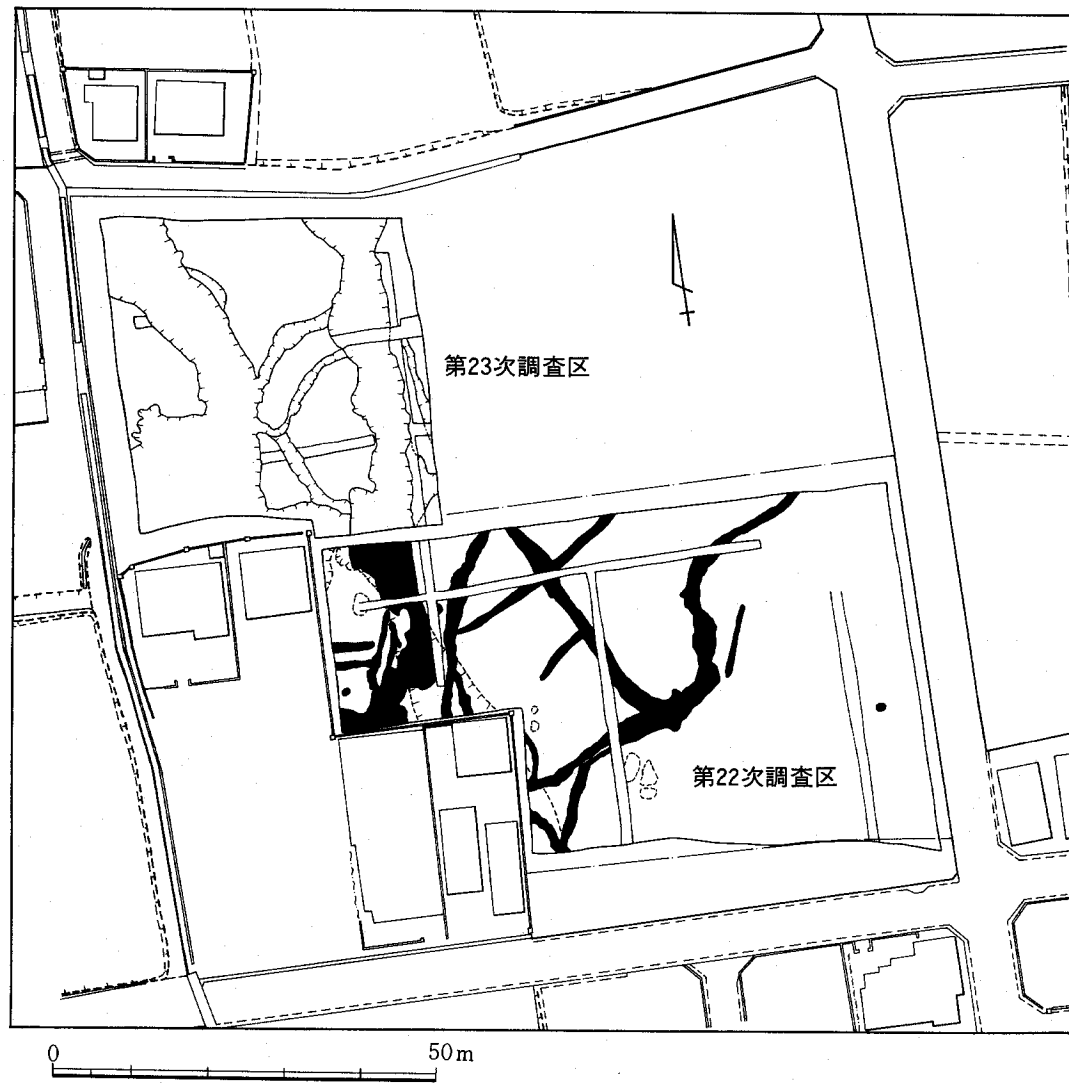


Fig. 2　周辺地形図（1/1000）

III. 調査の記録

1. 調査の概要

試掘調査によって、調査地点は旧河川が検出されるものの大幅な削平を受けており台地部分には遺構が残っていないという結果が得られた。また23次調査区の南側で先に実施された22次調査において、弥生時代から歴史時代にかけての河川が検出されたが、それ以外の遺構の残りは悪い。これらの調査結果を受けて23次調査を行ったが、予想通り遺構面の削平が著しく、検出した遺構は大小6本の河川とそれに伴う堰遺構・杭列のみである。

検出した河川には、22次調査のあとを受けて「21」番から検出順に連番号を与えた。また、河川を表す記号として「**SD**」を用い、「**SD－21**」のように表記した。堰遺構は各々の河川に伴うものであるため別に1～3の番号を与え、「**1号堰**」のように表記し、河川と区別した。

各河川について時代順にその概略を述べる。河川のうち、最も古いと考えられるのはSD－22で、他の河川に断ち切られており遺物は全く出土していない。また杭列など人工的な造作を一切受けていないため、本報告ではその説明を省いた。時期が特定できる最も古い河川はSD－21で、弥生時代前期末に埋没している。SD－21は南東から北西へ向かって流れる河川で、堰遺構（1号堰）が設けられている。この河川は砂の堆積によって一気に埋没しており、堰の残りは良い。SD－24･25はSD－21にやや先行するか、もしくはこれと同時期に埋没した小流路で、北東から南西に向かって流れるものと考えられ、SD－21の堰遺構の下流側でこれに合流している。次にSD－21を切る河川SD－26がある。この河川は調査区南西隅でその一部を確認したのみであるが、これにも堰遺構（2号堰）が設けられており、SD－21がその埋没後に西側へ流路を移動させてSD－26となった可能性が高い。SD－23は古墳時代の河川で、ほぼ南から北へまっすぐ流れている。埋没した土層の状況から上下二層に分けられる。下層では、河川の東側に集中して護岸杭列が密に打たれており、これは砂の堆積によって埋没している。上層では小規模な堰遺構（3号堰）が設けられ、これは粘質土の堆積によって埋まっており、下層とは水流の状態が大きく異なっていたことを示している。

これらの河川からは、縄文時代前期～古墳時代後期の土器・石器・木製品が出土した。河川の上流部にあたる22次調査地点では、縄文時代前・中期の包含層が検出されており、23次調査地点で出土した当該期の遺物は、これらが下流に流されたものと考えてよい。また、縄文時代晩期、弥生時代前・中・後期、古墳時代前期の遺物も出土しており、削平された台地部分ある

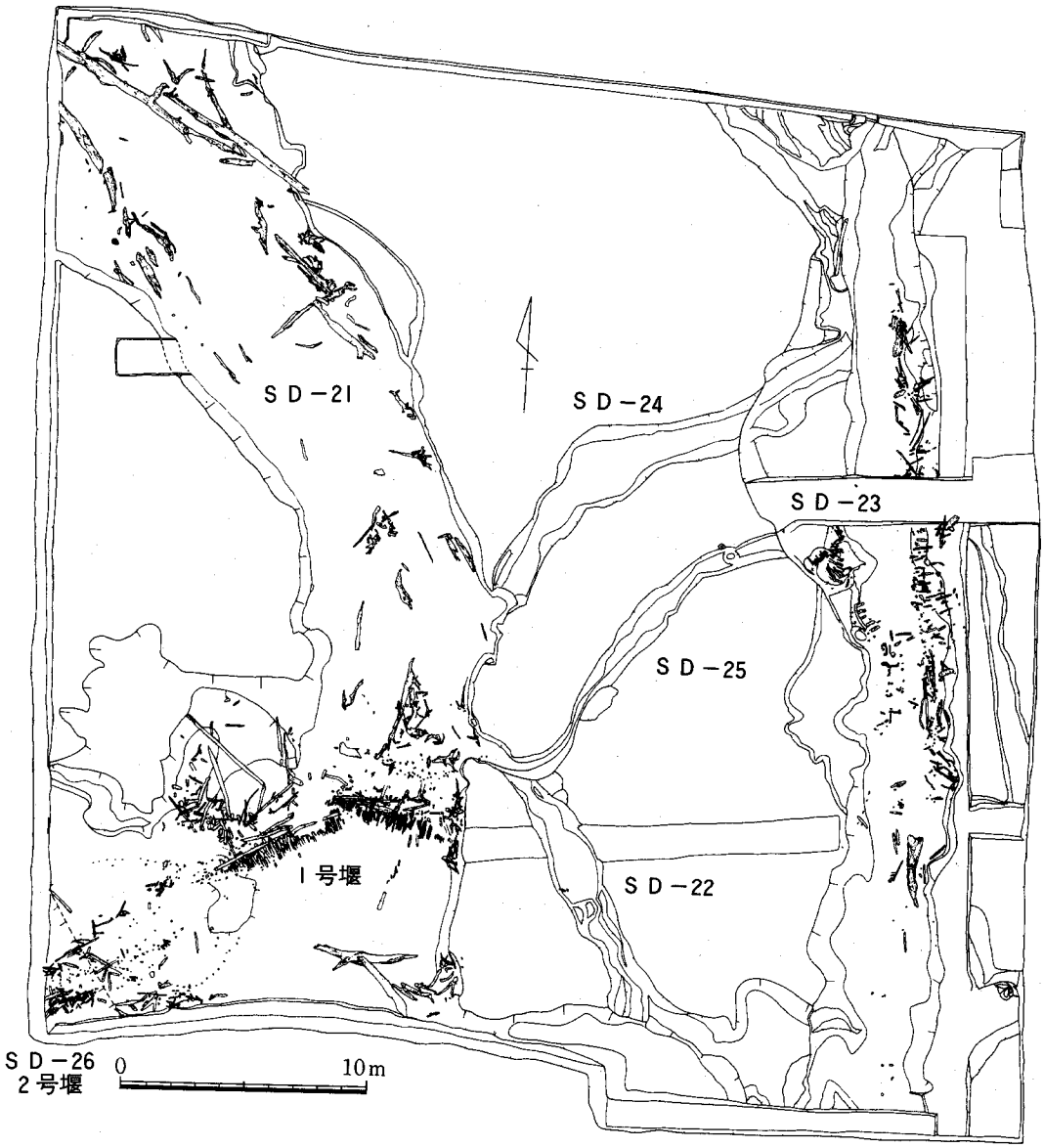


Fig. 3　遺構配置図（1/300）

いは河川の上流域に、これらの時期の遺構の存在が想定される。

2．遺構

（1）SD－21（Fig.4～6　PL.1～3）

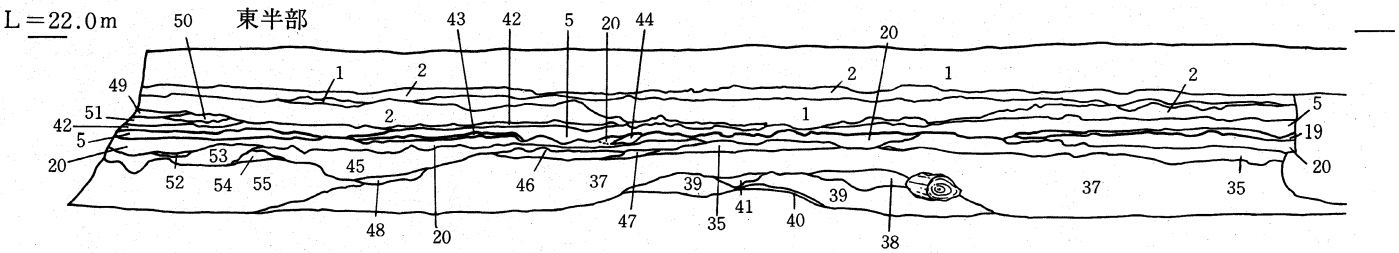
調査区の西半部に検出した堰遺構を有する河川である。全長41mを発掘調査した。堰遺構は河川の南端から5～9mの位置に設けられているが、これを境にして上・下流では河川のあり方に大きな差異がある。よってここでは便宜的に河川を堰遺構の上・下流域に分けて説明を加える。

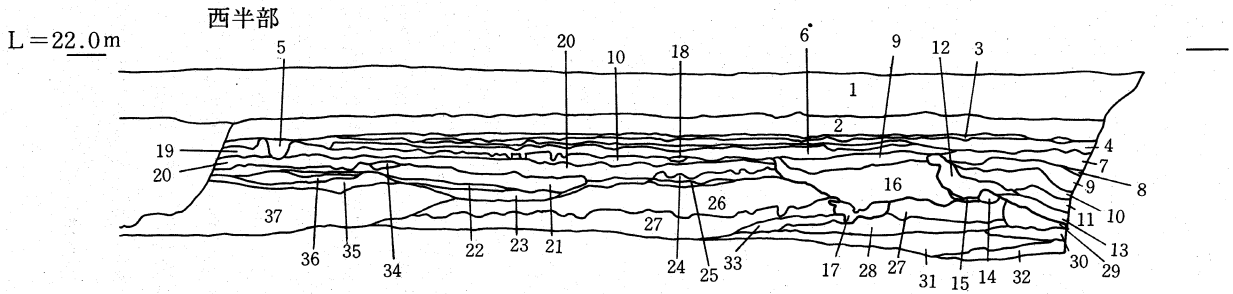
河川の上流域には堰遺構および杭列で構成される水流の大きな変換点が存在しているが、調査区内ではその一部を調査できたに過ぎず、全容は把握できない。調査区南端部を見ると、南東から流れて1号堰にぶつかると考えられる流路があり、その北岸が長さ12mに渡って確認される。ただしこの流路がSD－21の本流であるのか、それとも更に西側に別の本流があるのかは不明である。この水流は北西へ流れて調査区南端から北に5～9mの地点で1号堰にぶつかる。1号堰は後述するように東・西の二つに分けて構築されており、西側堰の背後（下流部）は堰からの水の落下によってえぐられ、広い窪みとなっている。また、1号堰の南西側には砂と粘質土の互層によって形成された高まりがあり、これは堰西端部から南西へと走り調査区南壁の1m手前まで伸びて切れている。この高まりの東側には縦杭が打ち込まれており、本来これは堰あるいはそれに類似する機能をもつ施設であったと考えられる。すなわち、1号堰およびそれから南西へ続く高まりによって半円状の大きな堰を構成した状況が想定される。

1号堰の西側にはSD－21から分流して西に流れる河川があり、その北岸を検出した。南岸は調査区外におよぶものと考えられる。この流路内に東西方向の杭列がある。この杭列は1号堰の西端部を発して、長さ約5mにわたり直線的に並んでおり、調査区西壁の手前約2mで終わっている。調査の際、河川の覆土を一気に掘り下げたため、この杭列は岸部から1mほど離れて打ち込まれたもののようになってしまったが、本来は北岸から南に伸びる砂州があり、この砂州の護岸を目的として打ち込まれた杭列であったものと思われる。

1号堰下流では、流路は10m北流したあと緩く西へ屈曲し、徐々に幅を広げながら調査区の北西隅へと流れている。1号堰北側で川幅6.5m、北西隅では12mを測る。河川の横断面形は両岸が急に立ちあがる逆台形状を呈し、川床面はほぼ平らである。深さは遺構検出面から0.6～0.7mである。

調査区南壁で土層観察を行った。（Fig.4）これによれば、まず南壁西側に本流をも持つ大河





1 盛土(レキ混じりのマサ土)
2 水田耕土
3 水田床土
4 黒褐色粘質土
5 淡黒褐色粘質土
6 黒褐色砂質土
7 灰褐～黒褐色砂質土
8 灰褐色 シルト
9 灰褐～黄白色 細砂
10 暗褐色粘質土と黄白色細砂の互層
11 暗褐色粘質土
12 暗褐色シルト質土
13 黒褐色粘質土(流木を多量に含む)…泥炭層
14 黄白色細砂～粗砂
15 暗褐色砂質土
16 黄白色細砂～粗砂と暗褐色粘質土の互層(流木を少量含む)
17 黄白色細砂粗砂(暗褐色土ブロックを含む)
18 黒褐色砂質土淡色褐色シルト(黄褐色粘土粒含む)
19 淡灰褐色シルト(黄褐色粘土粒を含む)
20 灰褐～淡灰黒色シルト
21 黄白色細砂(暗褐色粘質土ブロック含む)
22 暗褐色粘質土
23 黄白色細～粗砂 暗褐色粘質土混在
24 暗褐色粘質土
25 黄白色微砂
26 黄白色砂(上部 粗砂 下部 細砂)鉄分沈着
27 暗褐色粘質土
28 黄白色粗砂
29 黄白色粗砂
30 暗褐色粘質土
31 黄白色細～粗砂(レキを混じえる)
32 黄白色細砂
33 暗褐色シルト
34 黄白色微砂
35 褐色細砂～粗砂
36 淡黄褐色微砂
37 黄白色細砂～粗砂
38 暗褐色砂質土
39 暗褐色粘質土
40 青灰色粘質土(地山)
41 黒褐色細砂(流木含む)
42 灰黒色シルト
43 灰褐色微砂
44 淡黒褐色粗砂
45 暗褐色粘質土
46 淡褐色細砂
47 暗褐色微砂
48 淡褐色細砂
49 黒褐色土と黄褐色土 ブロック混人
50 淡褐色砂質土
51 灰褐色シルト
52 淡灰黒色シルト(20の一部)
53 淡褐色粗砂と暗褐色土の混在土
54 淡灰黒色シルト(52に類似)
55 黄白色細砂と黒色粘質土(腐蝕土)の互層

0 2 m

Fig. 4 SD－21南壁土層断面図 (1/80)

川があり、砂→粘質土→砂の順に堆積してこれを埋没させている。河川の幅は不明である。これを仮にⅠ段階とする。埋没後この河川の東側を切って新しく河川が流れており、これの西岸は南壁西端から東に7mの位置にある。この位置には先に述べた堰状の高まりがあり、杭が打たれている。東岸は同じく16mの位置にあり、ここに既述した北西へ流れて1号堰へとぶつかる流路が合流している。この河川は厚さ60cmにもおよぶ砂の堆積によって埋まっている。埋没は河川の西側で始まり、最後に東側が埋まっている。これがSD－21であり、Ⅱ段階になる。この後、河川の本流は見られず、Ⅱ段階の河川の西岸を削って流れる小流路があるのみで、これも砂と粘質土の堆積によって埋まっている。これがⅢ段階で、この時期は調査区内から大型河川が姿を消す。次に南壁の西端部分に新しい河川が開かれる。南壁では流路の東岸を確認できるのみで、川幅は不明である。東岸は南壁西端より東に4mの位置にある。さらにこれの埋没後、西側を流れる流路が起こる。東岸は西へ1.6m移動している。これがⅣ・Ⅴ段階で、後述するSD－26が流れた時期である。

河川からはコンテナにして2箱の遺物が出土した。出土土器には縄文時代前期～弥生時代前期末までのものが含まれているが、量的にも弥生時代前期末のものが主体を占めており、当河川の埋没時期を示している。また、河川内からは大量の流木が出土した。建築材かと見られるものも若干あるが、大半が自然の枝木で、とりわけ幹が目立つ。

1号堰

SD－21内にあり、河川の南端部より北に5～9mの所に位置している。また堰西端部から南西へ弧状に伸びる地形の高まりがあり、これにも杭列が打たれているが、既に述べたようにこれも堰本体と有機的関連をもつものである。堰本体は東西二つに分けて構築されており、東側は長さ6m弱、西側は7m弱を測り、両者が接する中央部分で前後に噛み合っている。両者は同様の手法によって構築されているが、用材の太さ、樹種には差異が見られる。堰の構築手法は、まず縦杭を打ち込み、これによって横木を固定し、この横木が枕になるように上流に向かって斜めに杭を打ち、更にこの斜杭の中ほどに杭を打ち込んでこれを補強している。横木には最も長いもので長さ5.6mの木材を用いているが、特別な加工の痕は認められない。杭に用いら

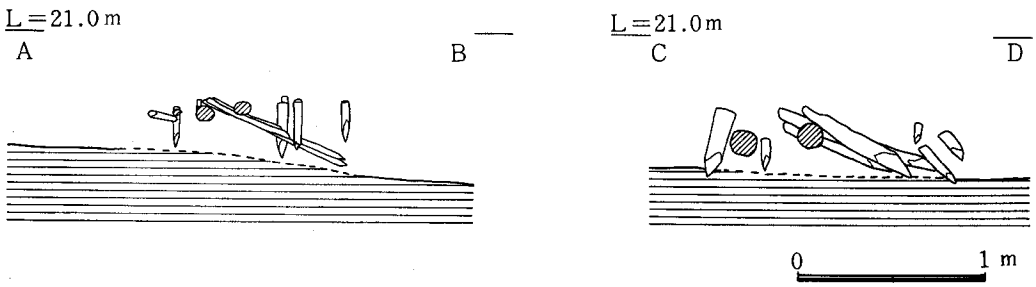


Fig. 5　1号堰断面図（1/40）

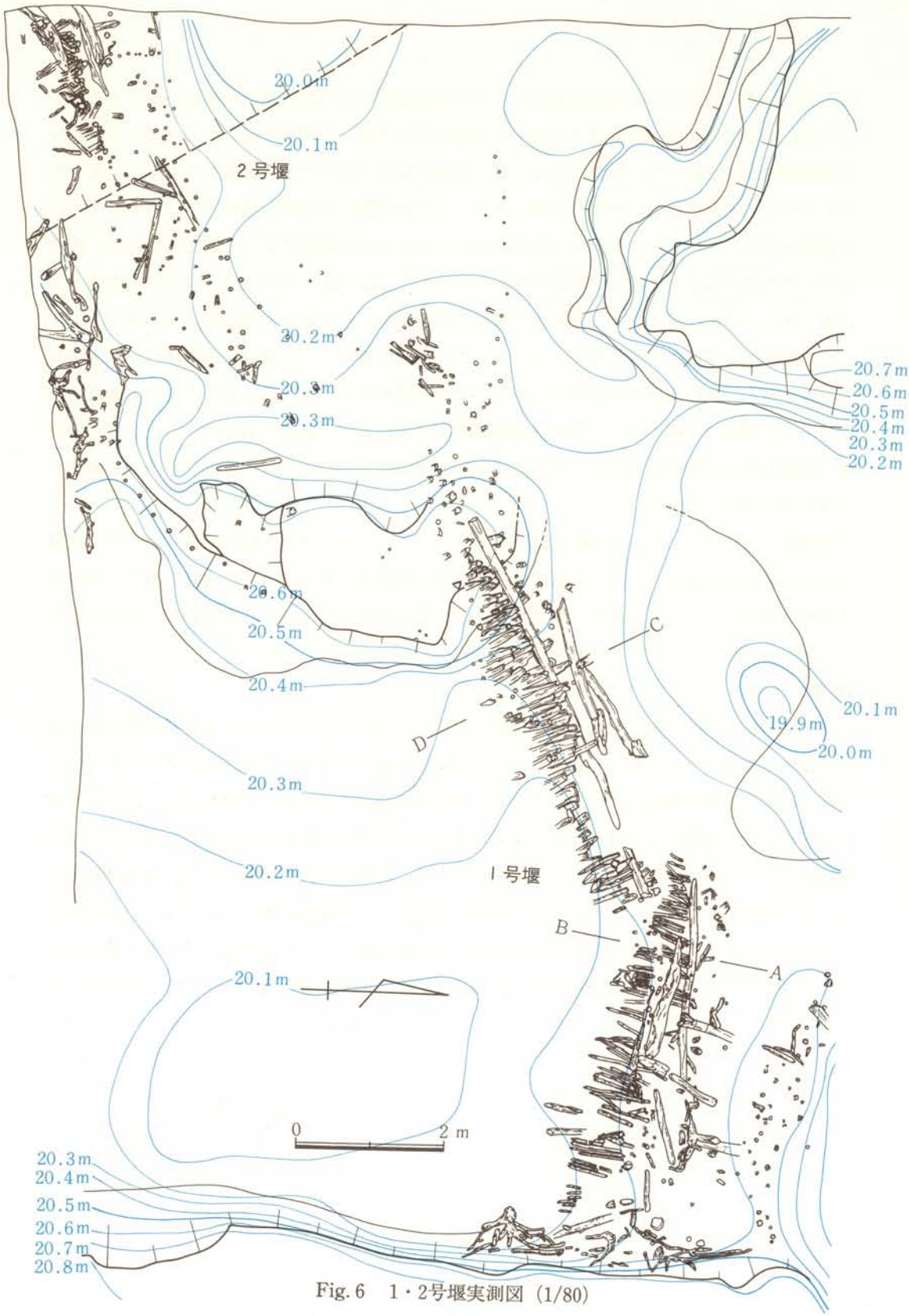


Fig. 6　1・2号堰実測図（1/80）

れる材は、東側では細めのもののみであるのに対し、西側では太めのものが多く、また東側に比べるとかなり密に打ち込まれている。これは流路の本流を西側で受け、これを東側に逃すことによって水の勢いを殺すように意図されて１号堰が構築されたものであることを示している。

これらの杭のなかから任意にサンプルを取り、樹種の鑑定を依頼した結果、東側では７本中４本がタブノキで、他はトベラ、ツバキ、サカキであるが、これに対し西側では５本中４本がシイノキ、１本がタイミンタチバナであるという結果が得られており、樹種にも特定の選択意識が働いていたことを示している。

（２）SD－24（Fig. 7）

調査区の中央部で検出した自然の小流路である。流路の方向は南西―北東である。北東端でSD－23（古墳時代河川）に断ち切られる。また南西端ではSD－21（弥生時代前期末）に切られるが、当河川出土土器はSD－21と同時期の特徴を示しており、SD－21と同時かもしくは若干先行する時期に埋没した河川と思われる。

河川の形状は、その中央西寄りのところで緩く屈曲する「へ」の字形をなしている。幅は屈曲部で最も広く3.1m、両端部では1.8mを測る。川床面は屈曲部で最も深く海抜19.74m。両端部の比高差はほとんどないが、周辺の地形から見て北東から南西に向かって流れ、SD－21の堰下流に合流するものと考えられる。

河川の覆土は概ね下層が砂、上層が粘質土であり、中位まで砂で一気に埋まり、のち粘質土の流入によって漸次埋没していった状況を示している。

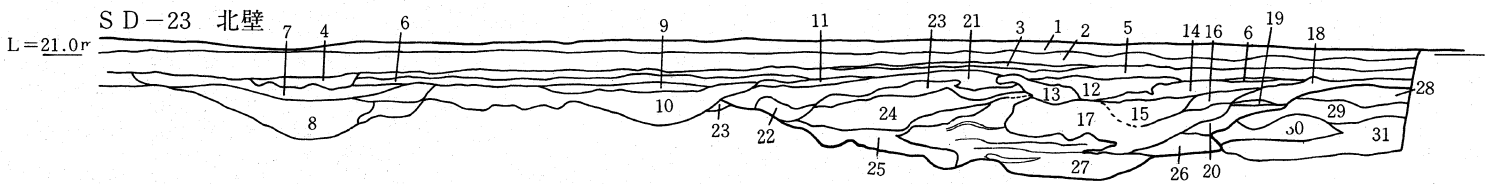
出土遺物は少ないが、弥生時代前期末の土器が大半を占める。

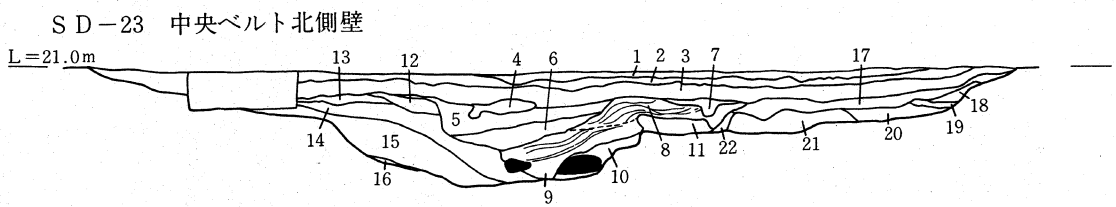
（３）SD－25

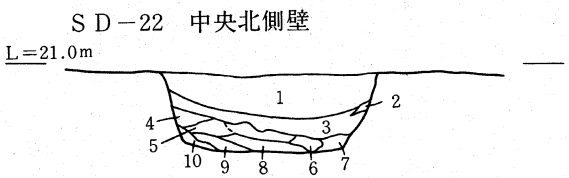
SD－24の南側をこれと約3.5mの距離を置いて並行して流れる自然の小流路である。北東端をSD－23に切られる。南西端ではSD－22を断ち切った後、緩く90°北西方向へ屈曲し、SD－21に切られている。SD－24同様、出土土器はSD－21と同時期の特徴を示しており、SD－21と同時もしくは若干先行する時期に埋没した河川と考えられる。幅は東北端で１m、中央部で最も広く1.5m、その西側で急にすぼまり0.3m、南西端で1.1mを測る。極めて浅く、平均0.1mの深さである。川床面の比高差はほとんどないが、中央部が若干浅く、両端部に比して＋0.05mである。周辺の状況から考えて、SD－24同様、西に流れてSD－21に合流する小支流であると見られる。

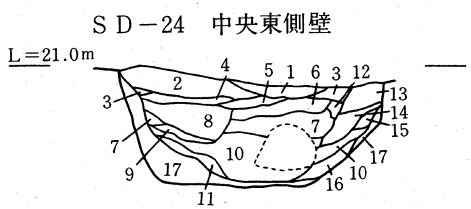
河川の覆土は砂である。

出土遺物は少ないが、土器は弥生時代前期末の特徴を示している。









SD－23　北壁

1 耕作土
2 灰褐色土
3 水田床土
4 暗褐色砂質土
5 黒褐色土
6 暗灰色粗砂
7 黒褐色粘質土
8 粗砂細砂有機物層の鏑状堆積
9 暗褐色砂質土
10 粗砂細砂有機物層の鏑状堆積
11 暗褐色砂質土
12 灰色砂層
13 淡褐色砂質土
14 淡黄褐色シルト(鉄分の沈殿)
15 暗灰色細砂
16 淡黄褐色シルト(鉄分の沈殿)
17 暗褐色土(木片を多く含む)
18 淡黄褐色シルト層
19 黄褐色砂(鉄分の沈殿)
20 暗褐色砂質土
21 暗褐色砂質土
22 暗褐色粘質土
23 暗褐色砂質土
24 粗砂細砂有機物層の鏑状堆積
25 暗褐色砂質土
26 黄白色粗砂
27 粗砂細砂有機物層の鏑状堆積
28 暗灰褐色粗砂
29 暗灰色粗砂・シルトの混合土
30 黒褐色粘質土
31 黄白色粗砂

SD－23　中央ベルト北側壁

1 灰褐色砂質土
2 暗褐～黒褐色粘質土
3 暗褐色砂質土
4 灰白色砂
5 黒褐色土
6 黄白色粗砂
7 暗褐色粘質土
8 暗灰褐色細砂質土
9 黄白色粗砂と暗灰褐色細砂の混合(鏑状堆積)
10 暗灰褐色土
11 暗灰色砂質土
12 灰白色粗砂
13 灰白色シルト
14 灰褐色砂質土
15 暗褐色土(木材を多く含む)
16 灰白色粗砂
17 黒褐色粘質土
18 灰褐色砂質土
19 黄褐色粘質土(下の部分に鉄分沈殿)
20 暗灰白色粘質土
21 暗灰色砂質土
22 灰白色粘土

SD－22　中央北側壁

1 褐色粗砂
2 黄褐色粘質土
3 黒褐色粘質土
4 灰褐色土
5 淡灰褐色粗砂
6 青灰色粘質土
7 1に類似
8 淡黒褐色粘質土と淡黒褐色砂質土の互層
9 暗褐色粗砂
10 青灰色粘質土

SD－24　中央東側壁

1 灰褐色粗砂
2 淡灰褐色粘質土
3 灰褐色粘質土
4 黄褐色粘質土
5 淡褐色粘質土
6 黒褐色粘質土に黄白色微砂がブロック状に混じる
7 黒色粘質土
8 淡灰褐色粘質土と黄褐色粘質土の混在土
9 淡灰褐色粘質土
10 黒色粘質土と灰褐色微砂の互層
11 青灰色シルトと黒色粘質土の互層
12 暗黄灰色粘質土
13 黄灰色粘質土
14 暗黄灰色粘質土
15 暗青灰色粘質土
16 15に類似する
17 地山(青灰色シルト)

0　2 m

Fig. 7　SD－23・22・24土層断面図 (1/80)

（4）SD－26（Fig. 4・6　PL. 4）

調査区の南西隅でその一部を確認した。この河川はSD－21を切って流れているが、覆土がSD－21と同様の砂であったため、調査区南壁および西壁の土層観察時に初めて確認した。

調査した流路の長さは東岸6mで、河川の大部分は調査区外にある。現状での川幅は調査区西壁から東へ3mであるが、これは河川自体が削平を受けて浅くなっているためで、この河川に伴う2号堰の杭列が西壁から東へ6mのところまで伸びており、本来の東岸の位置を示している。覆土は砂であるが、大きく2層に分かれ、上層が下層を切っており、岸が西へ移動した状況が見てとれる。上層では川床部に泥炭層の堆積が認められ、上層と下層では河川の水流の状態に大きな差異のあったことが窺える。上・下層とも川岸が砂地であるにもかかわらず、護岸を意図する杭列等は認められない。

遺物はSD－21に混入してしまった可能性もあるが、SD－21では弥生時代前期末を下る土器は出土していない。また、当河川にもSD－21同様堰遺構が構築されていることから見て、SD－21の埋没後、河川が西へ移動したものとして考えることができよう。

2号堰

SD－26に伴うもので、前後2列の杭列によって構成されている。杭列自体はSD－26の川幅を越え、大きく東側へ伸びているが、これは河川および堰の上部が削平を受けた結果による。前列の杭列は細めの材を用いて密に打たれており、これの前後に横木をかける。杭は頭を下流側にやや傾けて斜めに打ち込まれている。後列の杭列は細めの杭をややまばらに打ち込んでおり、杭はほぼ直立している。堰の下流は堰を越えて落下する水流のために窪んでおり、ここに堰から流れた横木が散乱している。堰の用材を任意に選出して鑑定を依頼した結果、すべて異なる樹種であることが明らかとなり、堰の用材に特別な選択は行われていないことが分かった。

（5）SD－23（Fig. 7・8　PL. 4～7）

調査区の東半部で検出した古墳時代後期の河川である。調査区東端に沿って北流し、川幅は4～5mの範囲に収まる。調査区内で長さ41mにわたり発掘調査した。河川の南端部で8m、北端部で10mとやや広がっているが、これは南端部の西側に水溜まり状の窪地、北端部の西側に流路より溢れて分岐する小流路があるためである。

土層は大きく3層に分離し得る。下から順に、III層有機質の粘質土，II層砂，I層粘質土である。最下層のIII層有機質粘質土は多量の流木を含んでおり、II層砂の堆積前に粘質土が流され、この流木が水流に洗われた形跡が認められる。II層砂の堆積後は水流が澱み、徐々にこの河川が埋没していった状況が窺える。I層を上層、II・III層を下層として調査を行った。河川

の深さは遺構検出面から1.2～1.4mであるが、かなりの削平を受けていることが想定される。

出土遺物はコンテナ3箱分である。縄文時代晩期～古墳時代後期の遺物があるが、川床面から6世紀後半頃の特徴を示す須恵器が出土しており、本河川の埋没時期を示している。

3号堰

SD－23の南端付近に、上層に伴うものと見られる小規模な堰遺構がある。直立して打たれた杭列により構築される。横木は依存していない。東西の長さは1.9mである。この堰によって水流をこの西側の水溜まり状の窪地（水口?）に導いたものと考えられる。杭は最も長いもので0.5mを測るが、これは上面が削平された結果によるものであり、堰本来の高さを示してはいない。

護岸杭列

II層砂の堆積により埋没した杭列で、河川の中央部、特に東岸沿いに密に打ち込まれている。杭と横木で構成されるが、横木は大部分が流されて下流側に堆積している。杭は垂直に打たれたものと、やや頭を西側（流路側）に倒して打ち込まれたものがあり、これによって横木を挟み込むようにして構築している。杭列は全長27mに及ぶ。

河川の西側では、ほぼ中央に狭いテラス状の段があり、ここに多量の杭が集中的に打ち込まれている。さらにこの南側には、5枚の板材を流路の壁に水平に打ち込んだものがある。河川への登降もしくは洗い場としての目的をもつ施設かとも考えられる。これとは若干異なるが、田村遺跡群の2次調査（第2地点）で河岸部に付設された石組みと杭からなるスロープが検出されており、やはり河川の登り降りに供されたものと考えられている。

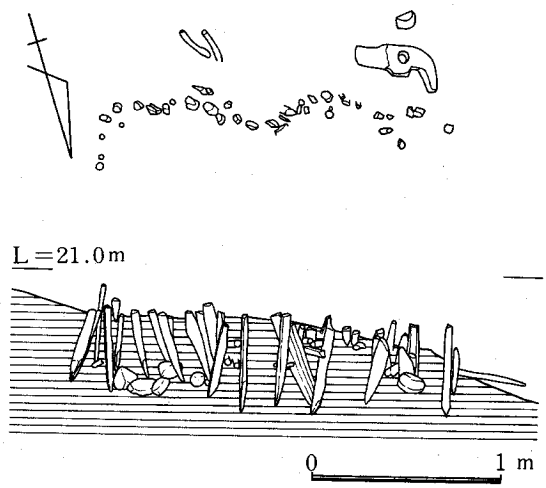


Fig. 8　3号堰実測図（1/40）

3. 遺物

(1) SD−21出土土器 (Fig. 9・10　PL. 8～10)

SD−21からはコンテナ2箱の土器が出土した。大半が縄文時代晩期後半(突帯文土器)～弥生時代前期末に属するが、それ以前の時期の土器も数点ある。弥生時代前期末以外の土器は小破片が多く、そのほとんどが水流によるローリングを受けて磨滅している。

1は深鉢形土器の口縁部片である。口縁が直立し、これに棒状工具を用いて外面に横・縦・斜方向の、内面に横方向の短沈線を刻み、幾何学的文様に施文している。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。内外ナデ調整。縄文時代前期の曽畑式土器である。

2は深鉢形土器の口縁部片である。口縁が外反し、口唇部は肥厚して外側に面をなし、端部は上方につまみ上げて突出させる。口唇外面に沈線2条を引いている。胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、色調は風化によって乳灰色を呈す。焼成は不良で、調整手法は器面剝落のため不明である。縄文時代後期に属する。

3は小破片のうえ磨滅が著しく明確ではないが浅鉢形土器の口縁部と考えられる。胴部が球形に大きく膨らみ、口縁は強く屈曲しやや外傾して立つ。胎土は精良で、色調は内外灰黒色を呈す。焼成は良好で、土器を燻して胎土に炭素を吸着させている。調整は内面ナデ、外面と口縁内面は風化のため明瞭ではないが、丁寧なナデもしくは研磨と思われる。所謂黒色磨研土器で、縄文時代晩期に属する。

4～14は甕形土器である。

4～6は口縁部の破片ではあるが、底部から膨らみをもって立ち上がる器形をなすと考えられる一群で、口縁部には一条の刻目突帯を貼付する。突帯は4・5は口縁部より下位、6は口縁部と同高で口唇上方に面をつくる。4～6の胎土はともに砂粒を含み，4・6は更に雲母粒を含む。色調は4は外面黒褐色ないし灰褐色、内面淡黒褐色、5は内外面黒褐色、6は外面黒色、内面明黄褐色である。焼成はみな良好。調整は4は外面に僅かに貝殻による条痕かと思われるものが残るが磨滅のため明確ではない。5・6は内外面ともナデ調整である。突帯の刻目は4が貝殻腹縁の押圧、5が棒状工具の端部を押圧、6がヘラ刻みにより施されている。

7～13は胴部上位で「く」字に内側に屈曲する甕形の器形をなす一群である。7～12は口縁部片、13は胴部片である。7～11の口縁端には刻目突帯を貼付しており、突帯の位置は7～10が口縁端より下位、11は同高である。12は突帯および刻目がない。13は胴屈曲部の破片で、刻

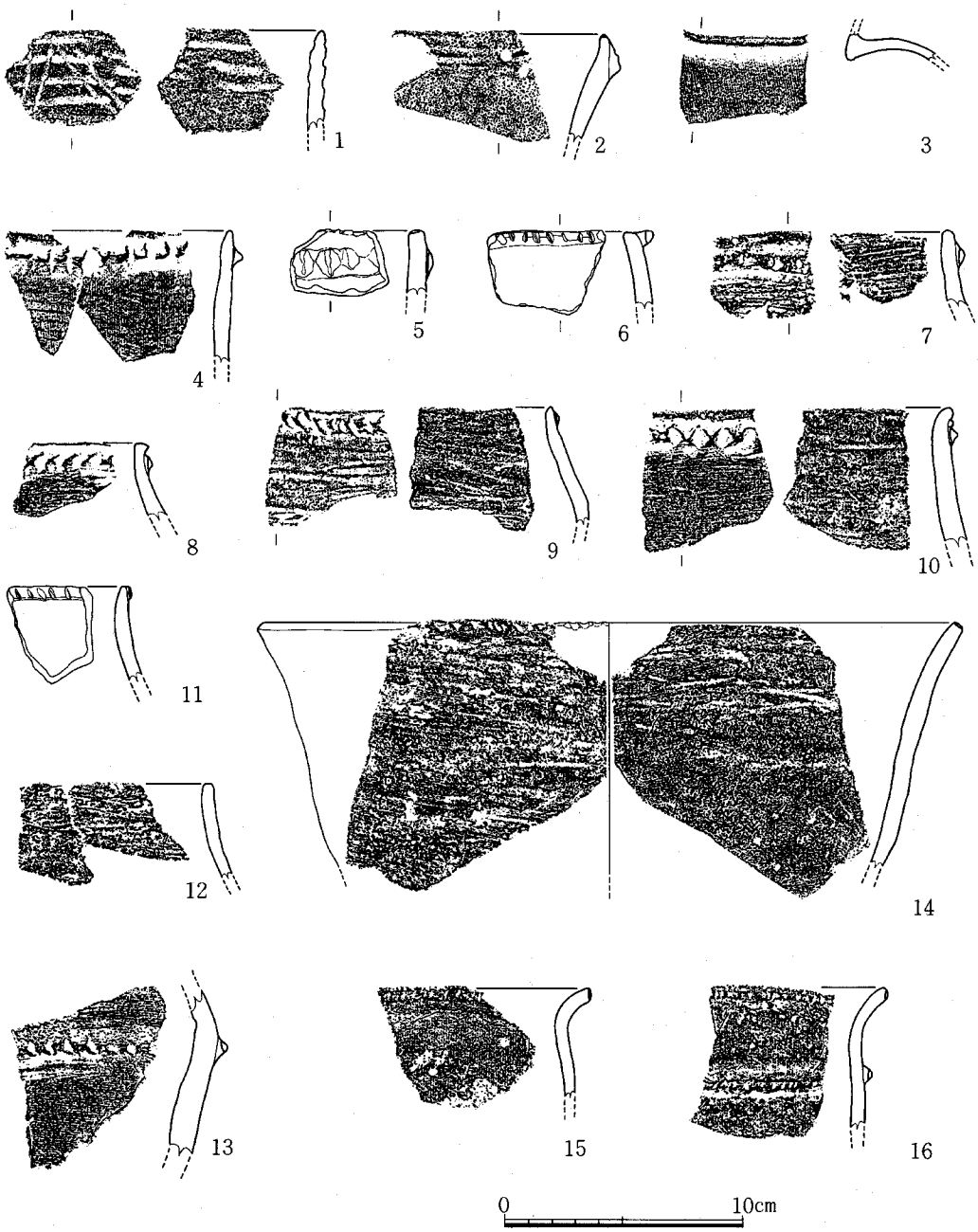


Fig. 9　SD－21出土土器実測図・Ⅰ (1/3)

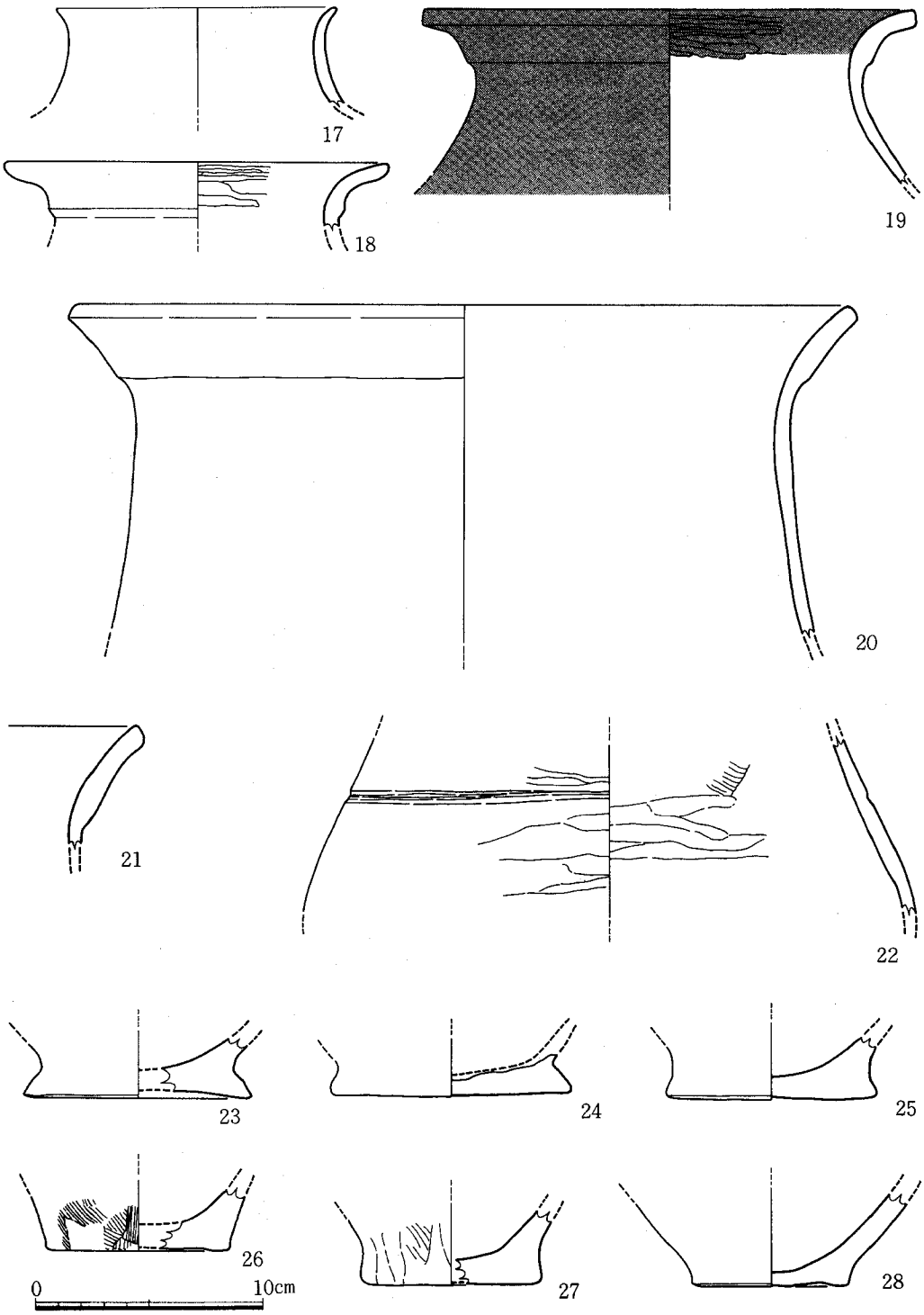


Fig.10　SD－21出土土器実測図・II（1/3）

目突帯を屈曲部の直下に貼付する。7～13の胎土には砂粒および8を除き雲母粒を含んでいる。色調は7は内外面黒褐色ないし暗黄褐色、8が黒褐色、9が黒褐色ないし暗灯褐色、10が黒色ないし灰褐色、11が外面暗黄褐色、内面黒褐色、12が外面暗黄褐色ないし黒褐色、内面黒色、13が内外面黒褐色を呈する。焼成は9がやや不良、他は良好である。調整は7が内外とも板状工具による粗いナデ(擦過痕)、9は外面が貝殻条痕と擦過痕、内面が擦過痕の後口縁部をナデ消し、10は内外とも板状工具による擦過痕、12は外面が板の擦過痕、内面ナデ、13は内外とも擦過痕である。そのほかの土器は器面剥落のため調整手法が不明である。突帯の刻目は7～10・13が棒状工具の押圧、11がヘラ刻みであるが、特に9の刻目は雑な感じを与える。14は4～6と同器形のものだが、突帯はなく、口縁部は外反してそのまま終わり、口唇部に直接刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面黒色ないし赤褐色、内面黒褐色で、焼成は良好である。調整は板状工具による横位の粗いナデ（擦過痕）で、外面は時計回り、内面は逆時計回りに行っている。口唇の刻目は棒状工具の押圧によるもので、浅い。口径は復元推定で29.7cmを測る。

15・16は口縁部が如意形に外反する甕形土器である。16は頸部に刻目突帯を貼付しており、15・16ともに口唇部に刻目を入れる。ともに胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は15が内外面とも黄褐色ないし暗黄褐色、16が黒褐色ないし暗灯褐色を呈す。焼成は15が良好、16はやや不良。調整はともに内外面ナデ、刻目はともにヘラにより浅く施されている。

17～22は壺形土器である。17は口縁部片で、内傾外湾して立ち端部で強く外反する。胎土は精良で色調は外面灯褐色、内面灰黄色、焼成は良好である。調整は外面の一部に横位の丁寧なヘラナデ（研磨か）の痕跡を留めるが、器面が剥落しており明確ではない。口径は復元推定で12.4cmを測る。ローリングを受け著しく磨滅している。

20・21は同形の壷形土器で、21はやや大ぶりである。内傾して立つ頸部に緩く外反する口縁部がつき、口縁外面に粘土帯を貼付し段を作る。ともに胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は20が内外面淡赤褐色、21が赤褐色で、焼成は20がやや不良、21が良好である。調整は20が外面ヘラナデ、内面ナデ、21は内外面ナデ。20の口径は復元推定35cmを測る。

18・19もやはり同形の壷形土器の口縁部片である。頸部が内傾外湾して立ち、口縁部で強く外反する。口縁部外面に粘土帯を貼付し、段を設けて頸部と区別している。口縁端は18は丸く、19は面をなす。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は18が外面淡褐色、内面淡灯褐色、19が外面赤褐色、内面灯褐色を呈す。ともに焼成は良好で、調整は頸部が内外ナデ、口縁部は外面横ナデ、内面はヘラ研磨である。19は外面全体と口縁内面に丹塗りを施す。口径は復元推定で18が17cm、19が22cmである。

22は壷形土器の肩部片で、胴部から頸部への移行はなだらかであり、一条の沈線でこれを画

している。沈線は施文時に一部ずれて二重になっている。胎土は精良で雲母粒を含み、色調は内外面淡赤褐色、焼成良好である。外面ヘラナデ、内面は全面ナデの後、頸部に刷毛目調整を加え、胴部にはヘラナデ調整を施している。

23～28は底部片である。23～25は裾が外に張り出し台形状をなす平底で、23は外底面がやや窪む。胎土にはともに砂粒を含み、23・25は更に雲母粒を含む。色調は23が外面淡灰褐色ないし灰白色、内面灰褐色、24が外面黒褐色、内面は器面剝落のため不明、25は外面淡褐色、内面淡黄褐色を呈す。焼成は23が不良、24・25は良好である。調整は23が内面ナデ、24が外面ナデ、25が内外面ナデの他は器面剝落のため不明である。24以外は破片資料で、底径は23が推定10cm、24が10.7cm、25が推定9.4cmである。26・27は同形の平底で、27は裾が若干外へふんばる。26の内面には炭化物が付着している。ともに胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は26が外面黒褐色ないし淡褐色、27は内外面暗黄褐色ないし淡黄褐色を呈する。焼成はともに良好。調整は26が外面刷毛目、底面ナデ、27が外面刷毛目の後ヘラナデ、底面と内面はナデ調整である。ともに破片資料で、底径は復元推定で26が8.1cm、27が8.0cmである。28は薄手で、胴部はかなり外傾して立ち上がる。壺形土器の底部であろう。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面淡黄褐色、内面淡褐色ないし褐色を呈し、焼成は良好で、内外面ともナデ調整で仕上げる。底径は7.0cmを測る。

（2）SD－24出土土器（Fig.11　PL.10）

SD－24出土土器はFig.11の29～33、37、39である。

29～33は縄文土器で、同一個体だが接合しない。キャリパー形を呈する深鉢形土器の破片と思われる。胎土に砂粒を多く含み、色調は外面黒褐色、内面灰褐色ないし黄褐色を呈す。焼成は不良で脆い。外面は縦走するR一段の縄文を回転押捺しており、内面はナデ調整である。瀬戸内地方からの搬入品と思われる。

37は弥生土器で、口縁が如意形に外反する甕形土器である。口唇部に刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面が黒色ないし暗灯褐色、内面が淡黒色を呈し、焼成は良好である。全面ナデ調整で、口唇部の刻目は棒状工具の押圧による。

39は底部片である。浅い上げ底をなす安定のよい平底から内湾外傾して胴部が立ち上がる。胎土に砂粒を含み、色調は淡黄褐色ないし淡灯褐色を呈し、焼成は不良である。全面ナデ調整で、底径は6.2～6.5cmを測る。

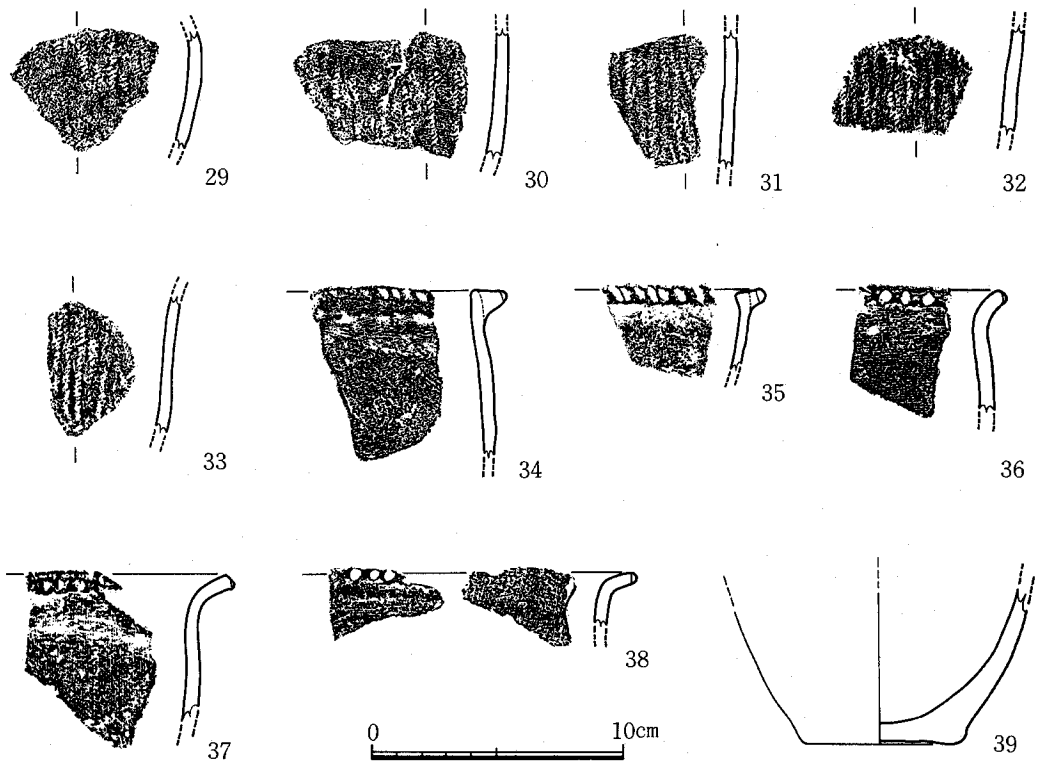


Fig.11　SD－24・25出土土器実測図（1/3）

（3）SD－25出土土器（Fig.11　PL.10）

SD－25出土土器はFig.11の34～36、38である。

いずれも甕形土器の口縁部片である。34は口縁が内傾気味に立ち、口縁端外面にこれと同高に刻目突帯を貼り付ける。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面暗褐色、内面暗灯褐色を呈し、焼成は良好である。調整は内外面ナデ、突帯を横ナデ。突帯の刻目は棒状工具の押圧による。35は口縁が内湾外傾して立ち、端部にはこれと同高にやや上向きの刻目突帯を貼り付ける。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は内面が黒褐色を呈する。焼成はやや不良。調整は内面ナデ。刻目は棒状工具による。36は如意形に外反する口縁部で、口唇に直接刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、淡灯褐色を呈し、焼成は良好である。内外面ナデ調整の後、口縁部のみ横ナデ調整する。刻目は棒状工具の押圧による。38も強く外反する口縁部で、口唇に刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面黒褐色、内面淡褐色を呈し、焼成は良好。内面に横位の刷毛目調整を施し、内外面を横ナデ調整する。刻目は棒状工具の押圧による。

（4）SD－23出土土器（Fig.12～14　PL.11～13）

縄文時代晩期～古墳時代の土器が出土した。SD－23は川床面から61の須恵器坏蓋が出土しており河川の埋没は6世紀後半以降であるが、出土した遺物は大半が弥生土器片であり、遺跡周辺から流れ込んだものである。ためにこれらについては代表的な器種のみを図化するに止めた。年代の古いものから順に説明を加える。

40、41は浅鉢形土器である。40は口縁部片で「く」字形に強く外反している。口縁内外に沈線を刻み、口縁端は丸い。胎土は精良で、砂粒・角閃石粒を少量含む。色調は淡灯褐色ないし黒褐色を呈する。器面が荒れているが、内外面ヘラ研磨調整であろう。焼成は良好で、燻しによって器表面に炭素を吸着させている。41は胴部で内側に屈曲した後、口縁部が外側に強く外反する器形をなし、口縁端には粘土帯を貼付して突起を形作っている。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面淡褐色ないし黒色、内面黒色である。焼成良好で、41同様燻している。水流に洗われ著しく磨滅しており調整は不明。40・41は黒色磨研土器と呼ばれるものである。

42～45は相似た器形の甕形土器である。口縁部が如意形に外反しており、口唇部には刻目を入れる。42は口唇を面取りし、その下端に刻目を施す。胎土に砂粒を含み、外面淡灰黄色、内面黒褐色ないし暗灯褐色を呈し、焼成良好である。調整は外面に縦位の刷毛目、内面ナデの後、口縁内外面を横ナデする。刻目は棒状工具の押圧による。口径は復元推定で23.0cmを測る。43は口縁部の面取り、刻目の施文位置は42と同様であるが、口縁の下方に二条の沈線を刻む。胎土に砂粒・雲母粒を含み、内外面とも黄褐色を呈し、焼成は良好である。調整は外面が縦位の刷毛目、口縁内面を横位の刷毛目（胴部内面は器面剝落）で、最後に口縁内外を横ナデ調整する。44は他のものより口縁部の屈曲が弱い。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は内外面とも暗灯褐色で、焼成は良好である。調整は胴部外面がナデ、口縁外面から内面にかけて横ナデ。刻目は棒状工具の押圧による。45は他より口縁の屈曲が強く、胴部上位に刻目突帯を貼付している。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は淡暗灯褐色を呈し、焼成は不良である。調整は外面が縦位の刷毛目の後突帯を横ナデ、内面がナデで、最後に口縁内外を横ナデ調整する。刻目は棒状の工具による。口径は復元推定で27.6cmである。

46・47は口縁が逆「L」字形に屈曲する甕形土器である。46は内傾内湾する胴部の上位に刻目突帯二条を貼付し、口唇にも刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は暗灯褐色ないし黒色を呈し、焼成良好。調整は外面ナデの後突帯以上を横ナデ、内面は上位がナデ、下半は器面が剝落して不明。刻目は棒状施文具の押圧による。口径は復元推定21.8cmを測る。47は胴部が直立するもので、口唇に刻目を施す。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は明黄褐色ないし淡黄褐色を呈す。焼成良好。調整は内外面とも丁寧にナデた後口縁内外面を横ナデする。刻目は

棒状工具による。口径は復元推定29cmを測る。

48・49は壺形土器の口縁部片である。両者とも口縁は外傾外反しており、口縁端内面側に粘土帯貼付による段を設け、端部の上・外向きに面を作り出している。49は更に口縁端外向面の上下端に刻目を施す。ともに胎土に砂粒・雲母粒を含むが、49はこれに角閃石が加わる。色調は48が外面暗赤褐色、内面淡黒褐色、49が内外面とも淡灯褐色ないし灯褐色を呈する。焼成は48がやや不良、49は良好である。調整は48が口縁上面と内面に粗い刷毛目、外面にナデを施した後、口縁内外を横ナデして仕上げる。49は外面ナデ、口縁端外向面横ナデの他は不明。口径は48が復元推定27cmである。

50は甕形土器の口縁部片で、「く」字形に開き、屈曲部に稜を持つ。胎土に砂粒を含み、内外面が淡灯褐色を呈し、焼成はやや不良である。調整は明瞭ではないが、外面を縦位の刷毛目、内面を横位の刷毛目調整の後、内面を横ナデか。口径は復元推定25.2cmを測る。

51は胴部片である。刻目突帯を一条付す。胎土に砂粒を多量、雲母粒を少量含む。色調は外面は淡黄褐色を呈すが、内面は器面が剝落している。焼成は不良である。調整は外面に叩きを施した後、突帯を貼付しこれを横ナデ調整している。

52～56は底部片でいずれも安定の良い平底である。52・53は裾部が外方へ踏ん張り、やや上げ底となる。52に比して53はやや肉厚である。胎土は52は精良で砂粒・雲母粒を少量含み、53は砂粒を含む。色調は52が淡褐色ないし淡黒褐色、53は外面が淡灰褐色で内面は器面が剝落している。焼成は52が良好、53はやや不良である。調整はともに全面ナデだが、52の外底面の一部には強いヘラナデの痕跡が認められる。底径は52が7.9～8.3cm、53が8.7cmを測る。54は円盤状の底部から胴部が立ち上がるもので、外底面に木葉の圧痕が残る。胎土は精良で、砂粒を少量含む。色調は黒褐色、焼成良好で、全面ナデ調整である。底径は復元推定8cmを測る。55・56は底部から胴部へスムーズに移行するもので、やや肉厚である。56は若干上げ底気味である。ともに胎土に砂粒を含む。色調は55が外面淡灰褐色、内面赤褐色、56は外面暗黄褐色で、焼成はともに不良である。調整は55が外面縦位の刷毛目、内面ナデ、56は外面縦位の刷毛目の後ナデ、底面ナデ。底径は55が8.2～8.4cm、56が復元推定7.4cmを測る。ともに内面に炭化物が付着している。

57は安定の悪い平底で、胴部はやや内湾気味に外傾して立つ。底部中央に一孔を穿つ。胎土は精良で、砂粒・雲母粒を少量を含む。色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好。調整は外面ナデ、内面は指で押さえた後これをナデ調整している。底部の穿孔は下方向から行っている。底径は復元推定7.6cm。

58は高坏形土器の坏底部片である。下面中央には脚部と接合するための突起がある。胎土は精良で雲母粒を少量含む。淡黄褐色を呈し、焼成は不良である。器面が荒れているが、下面が

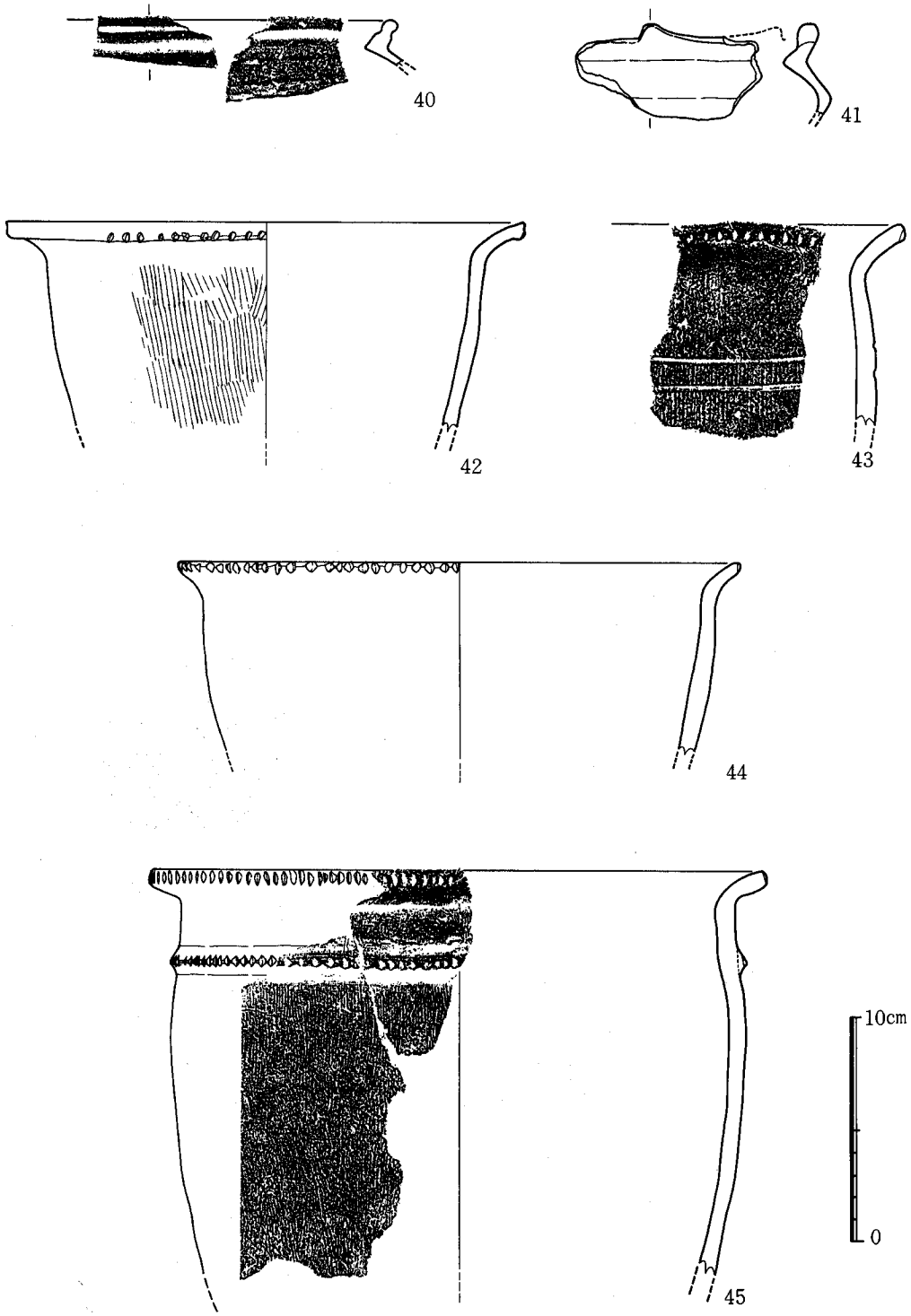


Fig.12　SD－23出土土器実測図・Ⅰ (1/3)

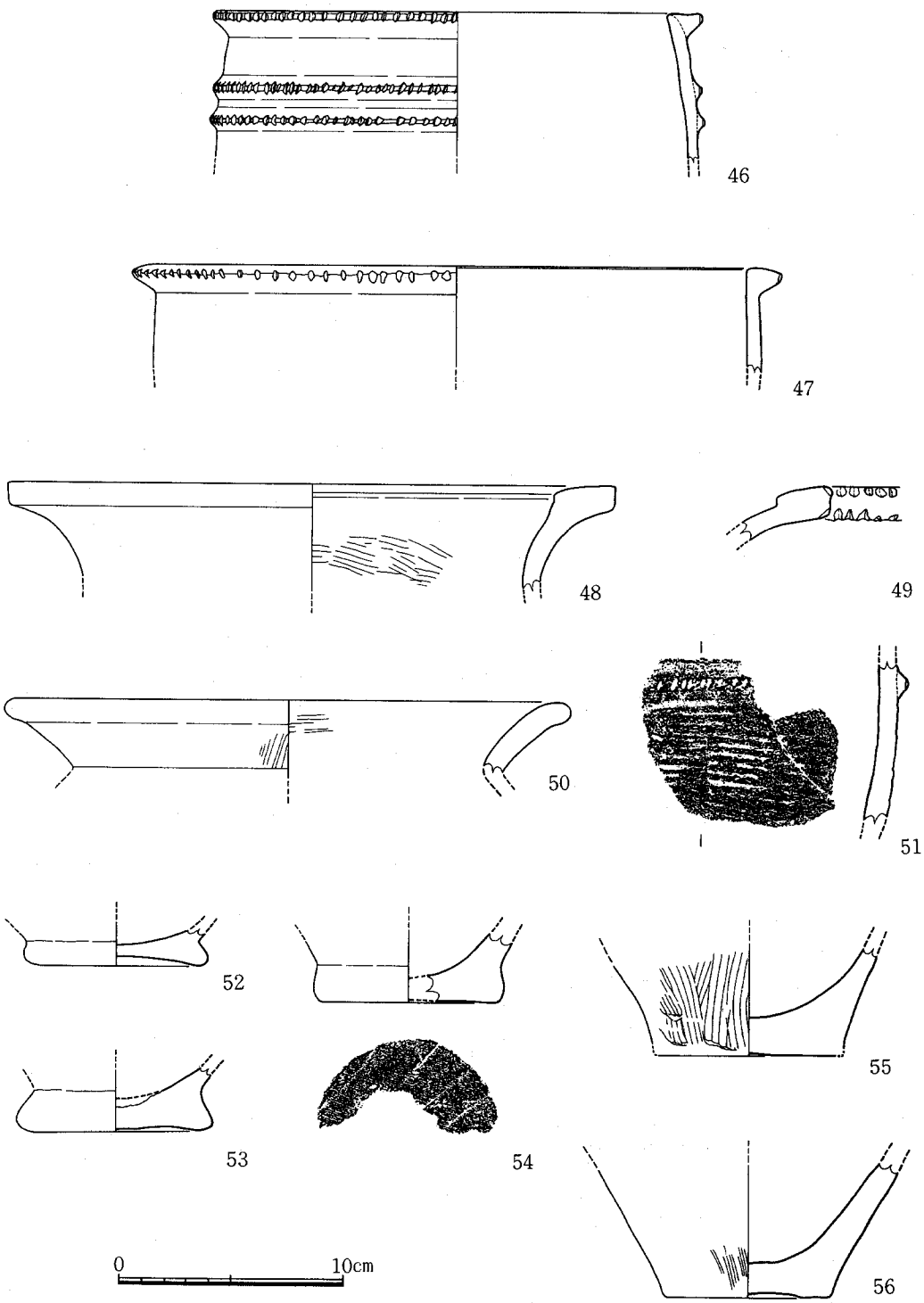


Fig.13　SD－23出土土器実測図・II（1/3）

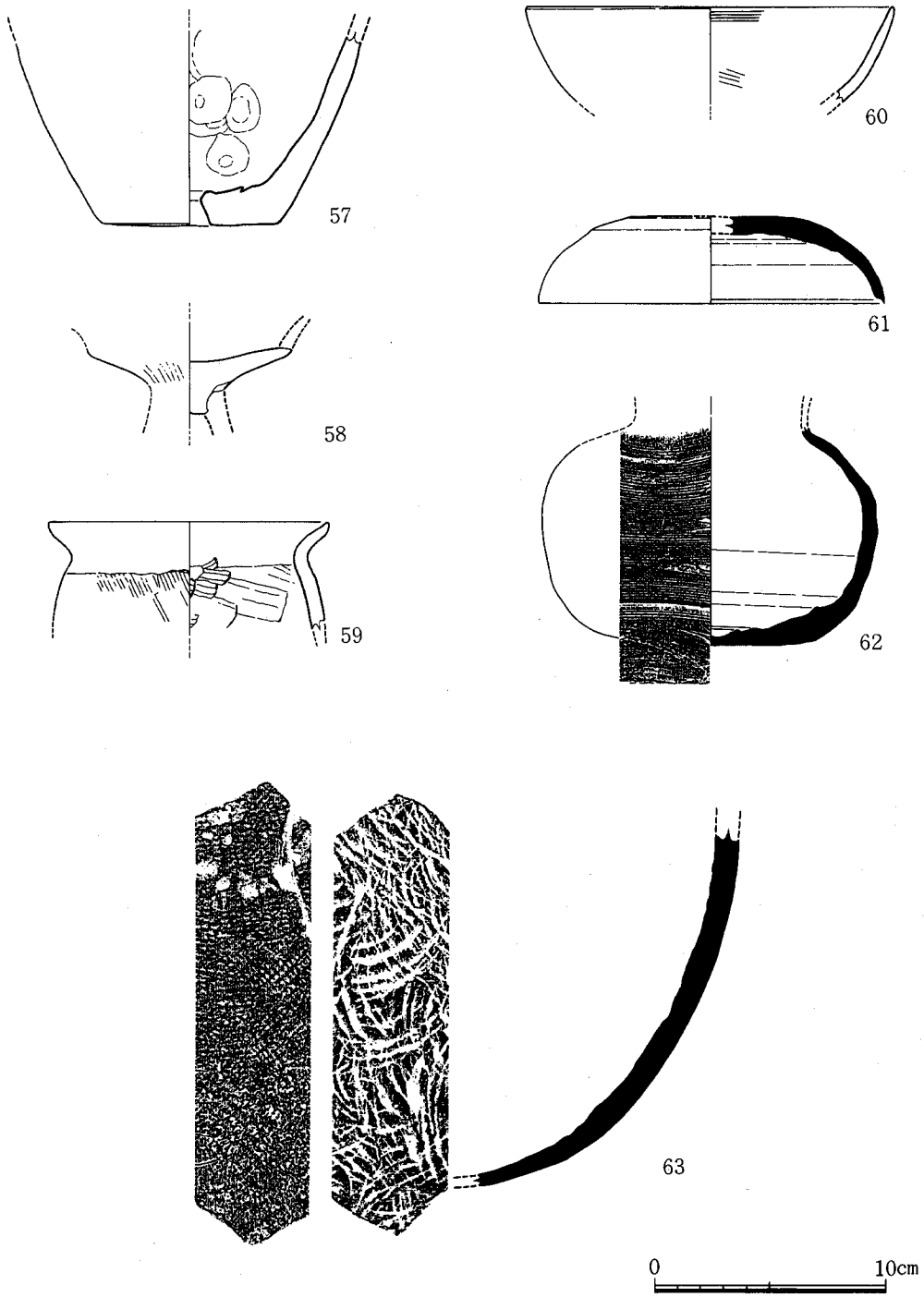


Fig.14　SD－23出土土器実測図・III（1/3）

刷毛目、上面が一部刷毛目の他はナデ調整か。

59は小型の壺形土器である。内湾する胴部に屈曲して短く開く口縁部が取り付く。胎土は精良で、砂粒・雲母粒を少量含む。色調は外面淡黄褐色、内面黒褐色ないし淡褐色を呈する。焼成良好。調整は胴部内外面を刷毛目の後、口縁内外を横ナデする。口径は復元推定12cmを測る。

60は椀形土器の口縁部片である。内湾して開き、端部は丸くおさめる。胎土は精良で、砂粒・雲母粒を若干量含む。色調は淡黄褐色、焼成良好で、調整は外面不明、内面は刷毛目の後ナデ調整して仕上げる。口径は復元推定16cmを測る。

61は須恵器坏蓋である。SD－23の川床面から出土した。天井部は丸く、体部との境は不明瞭で、口縁端に段を持つ。胎土に砂粒を若干含み、灰青色ないし灰赤色を呈し、焼成は良好。成形は時計回りのロクロで水引きの後、これを裏返して天井部に同方向のヘラ削りを加える。ヘラ削りは天井部の約1/2の範囲におよぶ。器形が歪み、口径14～15cm前後、器高3.8cmを測る。

62は須恵器の短頸壺もしくは平瓶である。胴部はやや偏平な球形をなし、丸底である。口縁部は失われている。胎土は精良、色調は黒褐色ないし灰色で、焼成は良好。成形は胴部を逆時計回りのロクロ成形の後、外面から粘土円盤を貼り付けて底部とする。調整は胴部に逆時計回りの回転カキ目、これを裏返して底部に時計回りの回転ヘラ削り、最後に底頂部をナデ調整の順に行っている。胴部最大径14.6cmを測る。

63は須恵器の甕形土器で、おそらく底部付近の破片と思われる。球形を呈しており、底部にあたる部分では外器面が磨滅している。胎土は精良、色調は淡黄褐色、焼成は不良で、一部に黒斑を認め得る。外面を格子文様の叩き板、内面を同心円の円弧文様の当て具を用いて成形している。

以上述べてきた土器群は、40・41が縄文時代晩期、42～45が弥生時代前期、46～49が同中期前葉、50・51が同後期、58～63が古墳時代のものである。

（5）その他の土器（Fig.15　PL.14）

64～67はSD－23を切るピットなどから出土した土器である。

64は把手で、断面山形に粘土塊を成形して、これに一孔を穿ったものである。胎土に砂粒・雲母粒を含み、色調は外面黄褐色、内面淡黒褐色、焼成は良好である。調整は内器面が横位の刷毛目で、他はナデ調整である。直径0.8cmの棒状工具で穿孔している。

65は土師質の深い鉢形土器である。胴部はまっすぐ開き、口縁は玉縁状に肥厚する。同一個体のものが他に一点あるが接合しない。胎土は精良で、砂粒・雲母粒を少量含む。色調は淡黄褐色ないし淡灯褐色で、焼成は良好である。ロクロ成形のあと、外面に格子目の叩きを施し、口唇から内面にかけて横ナデ調整する。口径は復元推定22cmを測る。

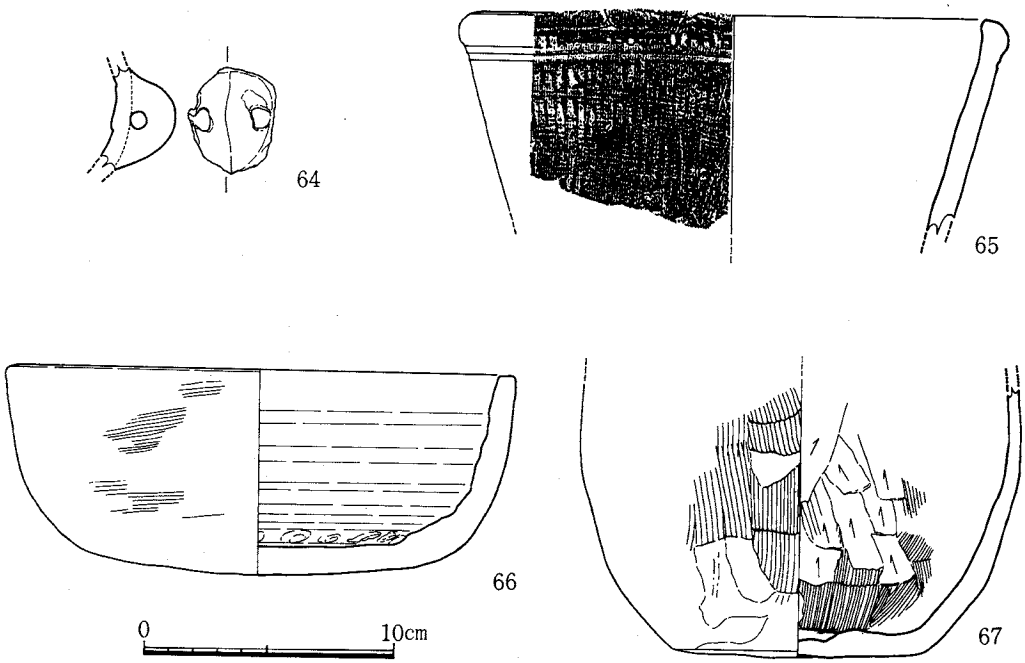


Fig.15　その他の土器実測図（1/3）

66は土師質の浅い鉢形土器である。底部は偏平な丸底で、体部が内湾して立ち口縁に至る。胎土は精良で、雲母粒を含む。淡灯褐色を呈し、焼成良好だが、外底面には黒斑が残る。内面にロクロ目を良く残しており、内底面には指頭痕が認められる。外器面は体部が横位の刷毛目、底部がナデ調整である。

67は土師質の土器で、胴部上半を欠くが、小型の壷もしくは甕形のものであろう。不安定な平底に球形に膨らむ胴部が付く。胎土は精良で、砂粒・雲母粒を少量含む。色調は外面が黒色ないし暗灯褐色、内面が淡灰褐色を呈し、焼成は良好である。調整は胴部外面が縦位の刷毛目のあと底部付近をナデ、底部外面は粗いヘラナデ、内面は下半を粗く刷毛目調整したのち、上半を木板によってナデ調整している。底径は復元推定10.1cmを測る。

（6）石器（Fig.16～19　PL.15）

各河川から出土した石器は、石鏃4点、二次加工ないし使用痕のある剥片5点、石匙片1点、石核2点、打製石斧2点、磨製石斧6点がある。土器の項で述べたように、河川からは縄文時代前期以降の各時代の土器が出土しており、これらの石器の年代決定は困難である。ために、ここに一括して器種ごとに説明を加える。

1～4は石鏃である。4点とも打製で、基部の抉りの浅い凹基式の鏃である。3・4は素材

となった剥片の主要剥離面を残している。1・3・4がSD－23（古墳時代河川）の上層、2が下層から出土した。石材は2が安山岩、他は黒曜石である。3は右側辺を、4は右脚を欠損している。法量は1が長2.4cm、幅1.9cm、厚0.5cm、2が長2.8cm、幅1.9cm、厚0.5cm、3が長2.7cm、幅1.7cm、厚0.4cm、4が長3.5cm、幅2.3cm以上、厚0.5cmである。

5～7・9・10は二次加工・使用痕のある剥片である。いずれも縦に長い剥片を利用している。5は打瘤を除去しており、剥片の両側辺に使用による刃こぼれが見られる。6は一側辺に二次加工を施している。7は剥片の上下両端が折れており、両側辺に小さな刃こぼれがある。9は下端が折れており、両側辺に刃こぼれがある。10は剥片の上半部が欠けており、両側辺に密に刃こぼれがある。5～7・9がSD－21（弥生時代河川）から、10がSD－23上層から出土した。石材は9が安山岩で、他は黒曜石である。

8は横に長い石匙の破片と思われる。つまみの部分は欠けている。横長の剥片を利用しており、表裏両面に素材の大剥離面・主要剥離面をそれぞれ残している。安山岩製で、SD－23上層より出土した。

11・12は石核である。2点とも不定形の剥片を剥ぎ取った痕が残る。11は正面を剥片剥離作業面とし、上下両端に打面を作出し、上下から加撃して剥片剥離を行っているが、剥離した剥片は寸詰まりのものである。12は石核の全縁辺から求心的に加撃しており、一定の方向性を持たない。石材は11が黒曜石で、12は安山岩かと思われる。ともにSD－23下層から出土した。

14・15は打製石斧である。14は撥形に刃部が広がる石斧である。縦に長い剥片の縁辺部に二次加工を施しており、剥片の打面、大剥離面、主要剥離面は残している。安山岩を素材に用いている。法量は長8.8cm、幅5.9cm、厚1.1cmを測る。15は石斧の基部側の破片である。磨製石斧が製作途中で折れたものであるかもしれない。石材は蛇紋岩か。14・15はともにSD－23下層から出土した。

13・16～20は磨製石斧である。13は偏平な石斧で、打ち欠きと研磨により成形している。両側辺の基部寄りに抉りを入れており、そこに横位の擦過痕が認められる。柄ずれの痕跡か。刃部の使用痕は刃縁に対し直交するものが主で、斜方向のものは稀である。蛇紋岩製。長10.6cm、刃部幅4.8cm、厚1.7cm。SD－21から出土した。この種の石斧は縄文時代前期～中期に多く見られるものである。16は大型の石斧の刃部片である。打ち欠きのあと研磨して成形する。SD－21から出土した。17は大ぶりの石斧の基部側の破片である。敲打により成形され、表裏両面の中央部分のみ研磨している。安山岩製。SD－23下層から出土した。18・19は太型蛤刃石斧の基部片と刃部片である。接合しないが、同一個体の可能性がある。両者とも敲打のあと研磨して仕上げる。玄武岩製。SD－23下層から出土した。20は柱状片刃石斧の刃部片である。打ち欠きのあと研磨して成形している。頁岩製。SD－22から出土した。

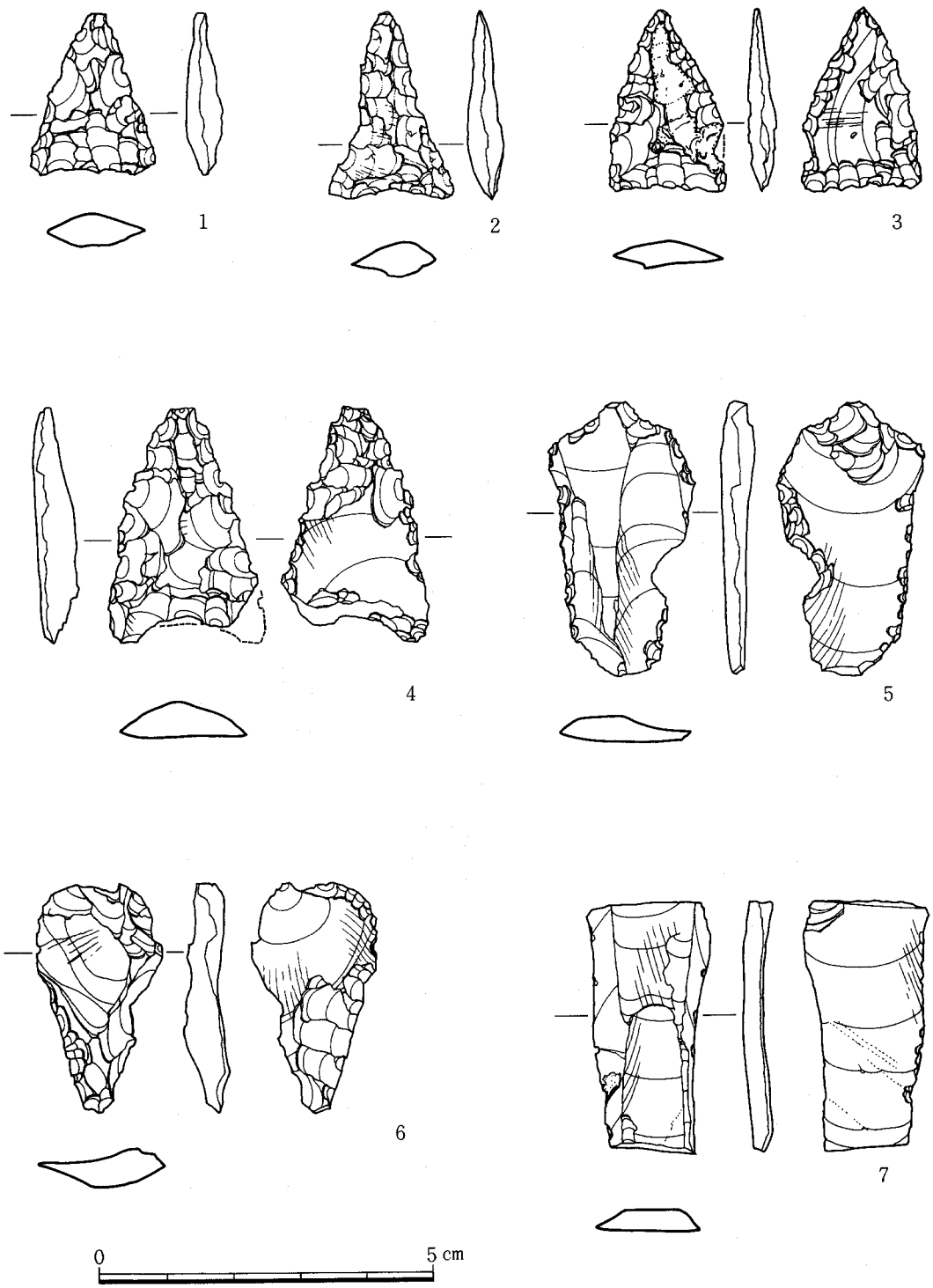


Fig.16　出土石器実測図・Ⅰ（1/1）

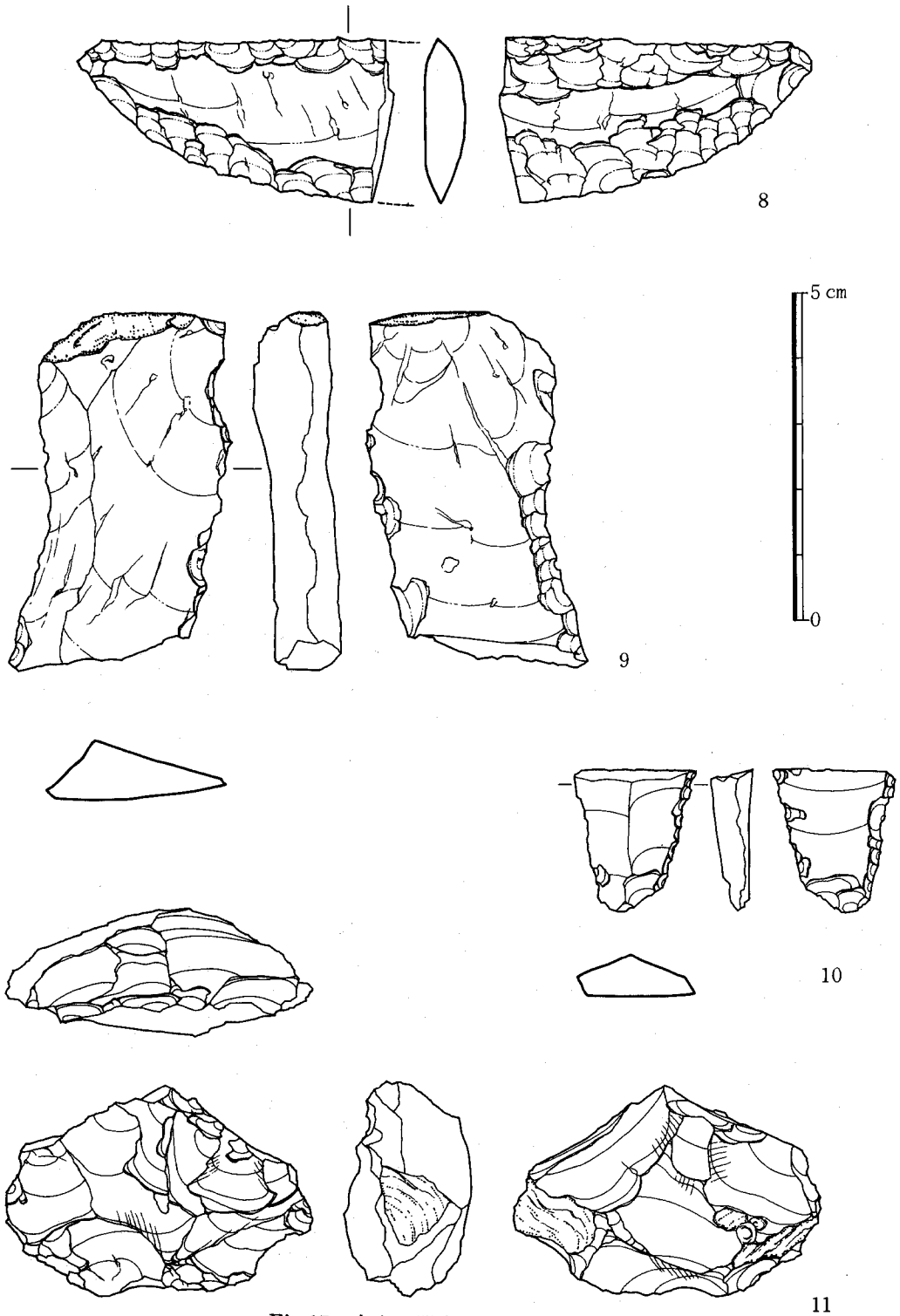


Fig.17　出土石器実測図・II（1/1）

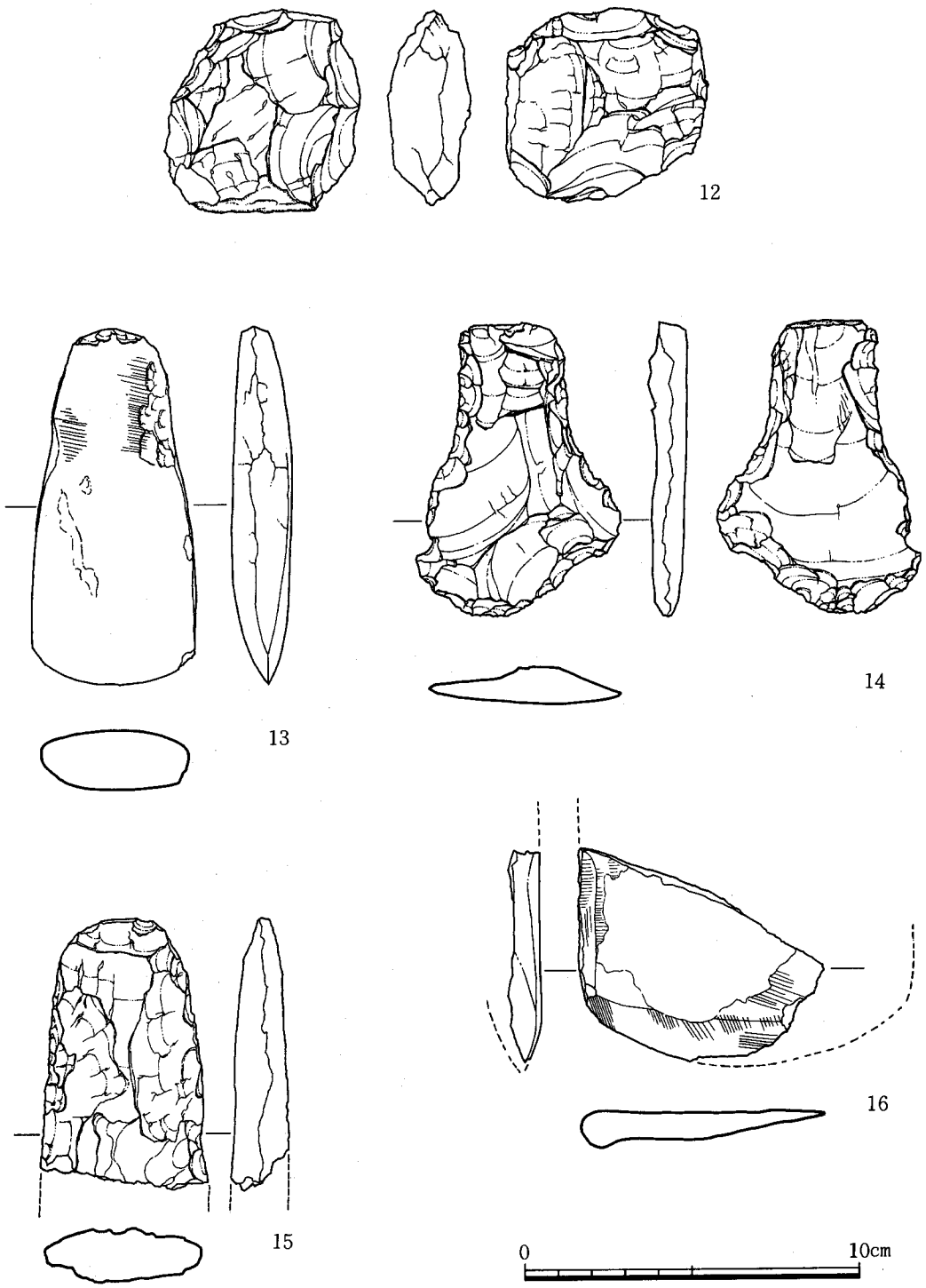


Fig.18　出土石器実測図・III（1/2）

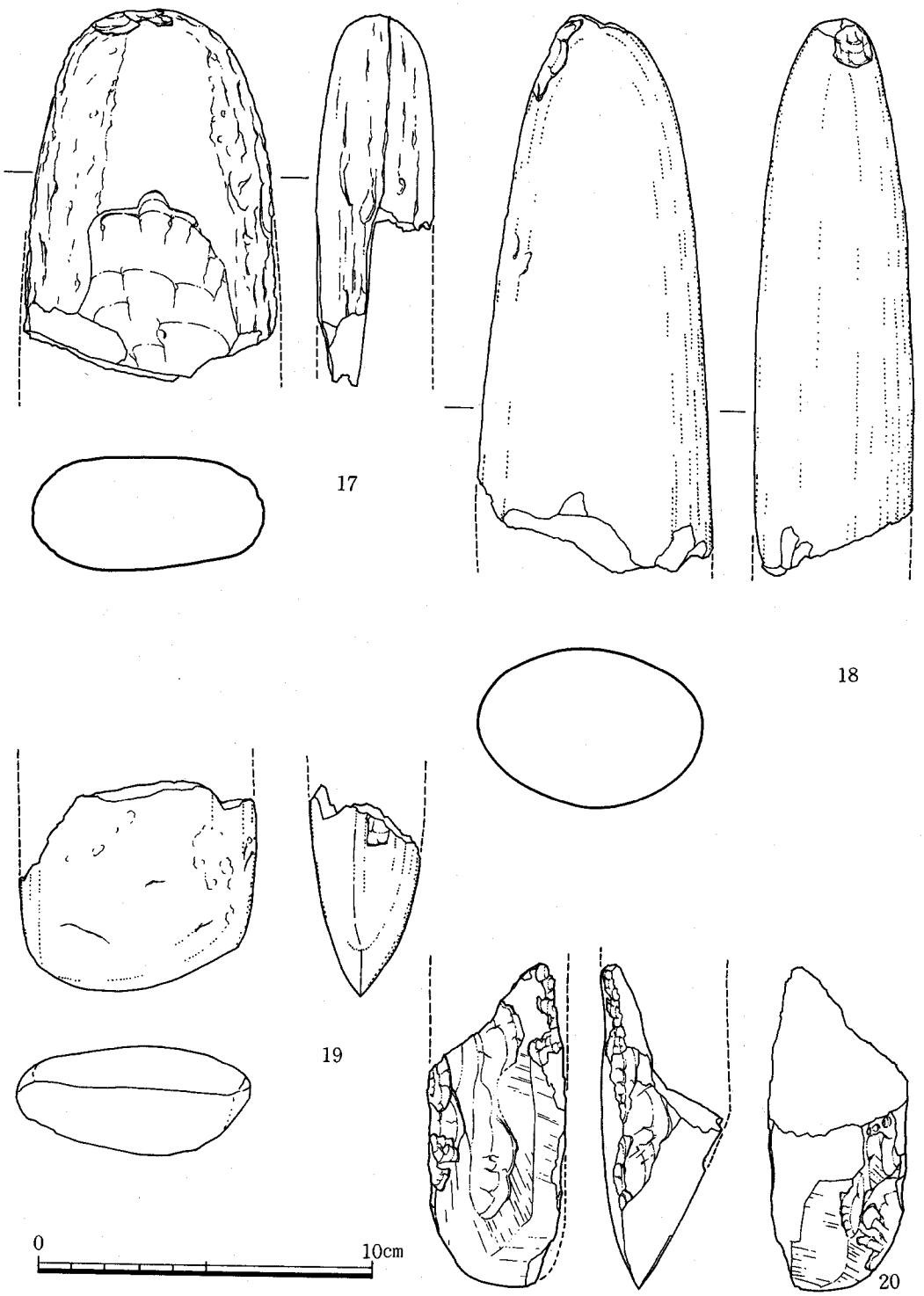


Fig.19　出土石器実測図・IV（1/2）

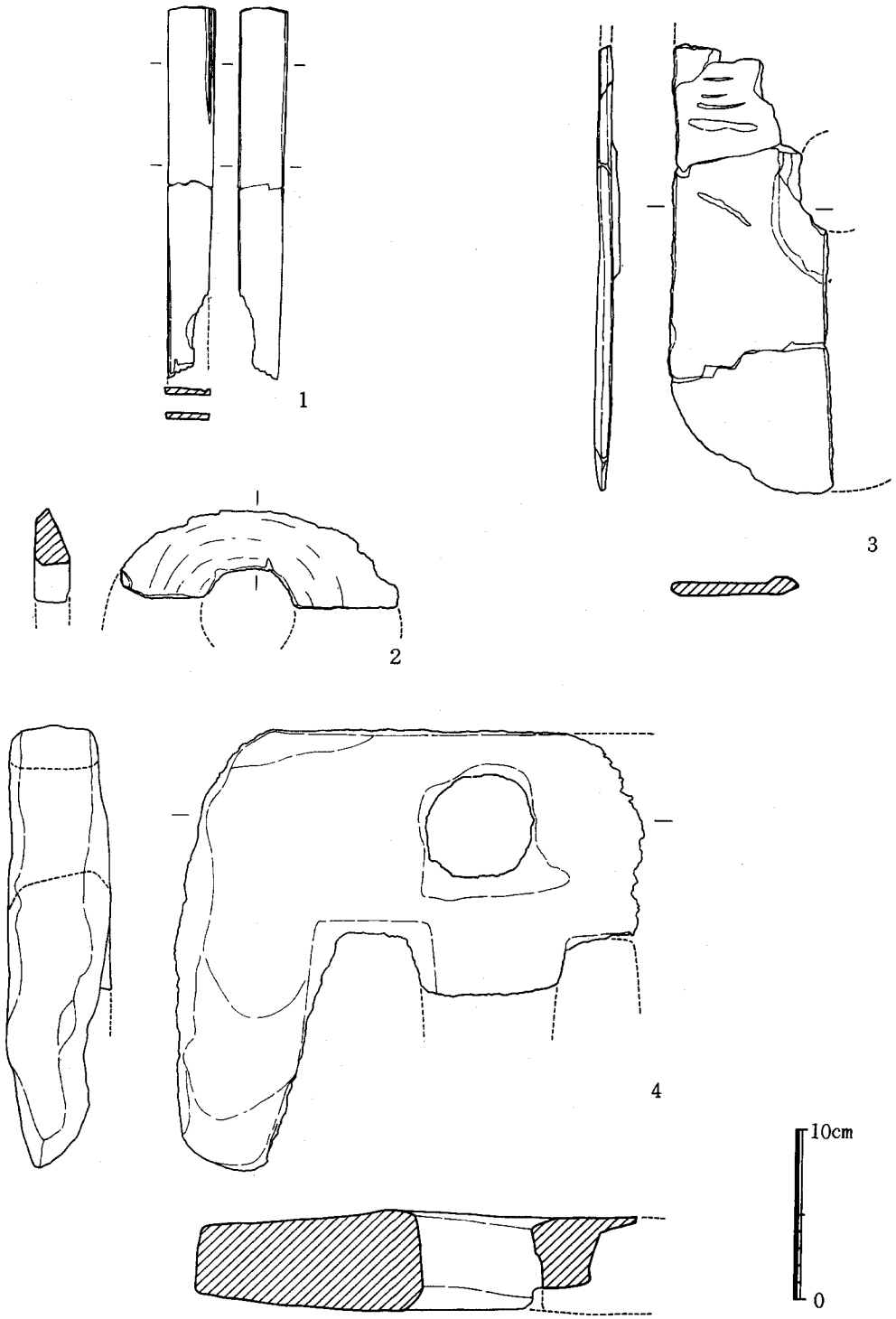


Fig.20　出土木製品実測図（1/4）

（7）木製品（Fig.20　PL.16）

1は細いヘラ状の木製品で、片面には一端から長さ7㎝にわたって浅い切り込みを入れている。他方の端部は折れて失われている。樹種はイヌガヤである。2は鍬の一部と思われるが、その大部分が欠損している。穿孔部が最も厚く、縁へ向けて薄くなる。カシ製。3は平鍬である。刃部と側辺部を含む全体の1/3ほどの破片である。穿孔部は片面のみ一段厚くつくる。刃部は使用によりすれて丸く薄くなっている。樹種はカシである。4はエブリ状の木製品で、本来は三叉であるが、片方の刃は完全に失われ、中央の刃先も欠けている。法量は長26.1㎝、厚さ6㎝で、幅は復元すれば35㎝前後になる。カシを素材にもちいている。以上の木製品は1～3がSD－21（弥生時代前期河川）から、また4がSD－23（古墳時代河川）上層の3号堰に掛かった状態で出土した。

Ⅳ．おわりに

今回の調査で検出した遺構は、大流路3本（SD－21、26、23）と小流路2本（SD－24、25）である。3本の大流路は各々に堰遺構を有しており、その埋没時期はSD－21が弥生時代前期末、SD－26がその少しあと、SD－23が古墳時代後期である。これらの堰遺構は当然のことながら水田水利に関わるものであろうが、調査区内では後世の開田に伴う地下げが著しいためか、水田遺構は検出できなかった。しかし、周辺は本来的には東に高い地形であったと考えられ、またSD－21・1号堰から西へ分流していく流路の存在を考えあわせると、弥生時代前期の水田遺構は調査地点の西側にひろがる可能性が高い。またSD－23が調査区の東側を流れることから見て、古墳時代後期の水田は調査区全域に広がっていたものと思われる。

V. 四箇遺跡群23次調査河川出土木材の樹種

京都大学木材研究所　伊東隆夫

福岡市早良区に位置する四箇遺跡群は、早良平野を流れる室見川東岸に広がる沖積地の上にある。同遺跡の第23次発掘調査により、以下の遺構が検出された。

（1）弥生時代前期の河川（SD－21）と河川に伴う堰遺構（1号堰）が検出されたが、北流する幹線流路(SD－21)から西側へ水を流すための堰と思われる。SD－21の西側に水田の存在が考えられる。

（2）SD－21を切る河川（SD－26）があり、2号堰が設置されている。SD－21より少し新しい時期のものである。

（3）古墳時代後期（6世紀）以降の流路が検出され(SD－23)、覆土の異なりにより上層、下層に分けられる。上層には3号堰が構築されており、それにからんでエブリ状の木製品が出土した。

（4）他に小さな流路3条が検出された。

1号堰や2号堰などから無数の杭や板状材が出土したが、そのうちから無作意に35個の試料を採取して樹種同定をおこなった。そのうち、1個は樹木ではなかったので残り34個について顕微鏡下で各試料の特徴を検討したところ、表1のような結果が得られた。この表に基づいて、木製品ごとに樹種の点数を整理すると表2のような結果であった。

杭に用いられた樹種は14種あり、いろいろな樹種が利用されていたことが伺える。針葉樹は、ただ一種イヌガヤが杭材に用いられており、これを除いて他はすべて広葉樹が用いられた。とくに、タブノキが6点出土しており杭材に最も多用されていた。そのほか、ブナ科の樹種、ツバキ、サカキ、イスノキが複数個出土した。日本各地の遺跡から出土した杭材の樹種同定結果が最近まとめられているが（日本の遺跡出土木製品総覧、島地　謙・伊東隆夫編、雄山閣出版、1988)、それによれば2000点余りの杭材が調べられ、80種以上もの樹の種類が用いられており、とりわけブナ科、クスノキ科、サカキ、アワブキ等が多く、サクラ、ツバキ、ヒサカキが多いほうであった。今回の調査で、四箇遺跡における杭材の利用樹種がこれまでとほぼ同様の傾向にあったことが認められた。しかし、トベラは今回はじめて杭材に使用されていたことが判明した。さらに、イスノキは上記の文献では2000点余りのうち3点が検出されたに過ぎないが、今回35点のうち新たに3点出土した。この結果は、九州地方においてイスノキの植生の分布が豊富であることを反映しているものと思われる。

表１　四箇遺跡23次河川出土木材の樹種一覧

試料番号※	整理番号	遺構			時代	木製品	樹種
1	38	SIK23	SD-21	１号堰	弥生前期	杭	タブノキ
2	51	〃	〃	〃	〃	〃	トベラ
3	46	〃	〃	〃	〃	〃	タブノキ
4	12	〃	〃	〃	〃	〃	タブノキ
5	84	〃	〃	〃	〃	〃	タイミンタチバナ
6	67	〃	〃	〃	〃	〃	ツバキ
7	118	〃	〃	〃	〃	板状	シイノキ
8	126	〃	〃	〃	〃	杭	シイノキ
9	228	〃	〃	〃	〃	〃	サカキ
10	300	〃	〃	〃	〃	〃	タブノキ
11	317	〃	〃	〃	〃	板材	シイノキ
12	374	〃	〃	〃	〃	杭	シイノキ
13	498	〃	〃	〃	〃	〃	ヒサカキ
14	518	〃	〃	〃	〃	板材	シイノキ
15	24	〃	SD-26	２号堰	〃	杭	アワブキ
16	46	〃	〃	〃	〃	〃	ツバキ
17	160	〃	〃	〃	〃	〃	タブノキ
18	180	〃	〃	〃	〃	〃	タブノキ
19	196	〃	〃	〃	〃	〃	クヌギ類
20	202	〃	〃	〃	〃	〃	サカキ
21	205	〃	〃	〃	〃	〃	クリ
22	209	〃	〃	〃	〃	板材	シイノキ
23	218	〃	〃	〃	〃	杭	イスノキ
24	251	〃	〃	〃	〃	〃	イスノキ
25	523	〃	〃	流木	〃	〃	イスノキ
26	535	〃	〃	〃	〃	板状	不明（樹木でない）
27	537	〃	〃	〃	〃	杭	イヌガヤ
28	237	〃	SD-23上層	〃	古墳後期	〃	カシ
29	283	〃	〃	〃	〃	板材	カシ
30	Fig.20-4	〃	〃	３号堰	〃	えぶり状木製品	カシ
31	7	〃	SD-23下層	流木	〃	板材	シイノキ
32	33	〃	〃	〃	〃	〃	クリ
33	73	〃	〃	〃	〃	杭	モチノキ類
34	125	〃	〃	〃	〃	板材	コナラ類
35	379	〃	〃	〃	〃	杭	サカキ
36	Fig.20-3※※	〃	SD-21	１号堰	弥生前期	平鍬	カシ
37	Fig.20-1※※	〃	〃	〃	〃	へら状木製品	イヌガヤ
38	Fig.20-2※※	〃	〃	〃	〃	鍬？	カシ

※試料番号は写真の番号に対応している
※※これら３点は追加依頼のあった試料であり、顕微鏡写真はない

なお、樹種同定の拠点は以下の解剖学的特徴によった。

表2　木製品別の樹種総数

木製品	樹種	点数
杭	イヌガヤ	1
〃	クリ	1
〃	シイノキ	2
〃	カシ	1
〃	クヌギ類	1
〃	タブノキ	6
〃	モチノキ類	1
〃	トベラ	1
〃	タイミンタチバナ	1
〃	ツバキ	2
〃	サカキ	3
〃	ヒサカキ	1
〃	イスノキ	3
〃	アワブキ	1
板材	クリ	1
〃	シイノキ	5
〃	カシ	1
〃	コナラ類	1
えぶり状木製品	カシ	1
へら状木製品	イヌガヤ	1
鍬	カシ	2
計		37

樹種同定の解剖学的特徴

イヌガヤ：*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch *f. drupacea* Kitamura（イヌガヤ科：Cephalotaxaceae）

樹脂道はないが樹脂細胞は多く、年輪内に平等に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚がみられる。

クリ：*Castanea crenata* S. et Z.（ブナ科：Fagaceae）

大形の環孔材。孔圏道管は多列で、孔圏外道管は火炎状に配列する。単穿孔を有する。放射組織は単列。

シイノキ：*Castanopsis sp.*（ブナ科：Fagaceae）

環孔性の放射孔材。孔圏道管は点在する。孔圏外小道管は火炎状に配列する。単穿孔を有する。放射組織は単列。なお、試料番号11と22（それぞれ、整理番号317と209）は集合放射組織を有していたのでツブラジイと言える。

カシ：*Quercus sp.*（ブナ科：Fagaceae、アカガシ亜属：*Cyclobalanopsis*）

放射孔材。やや大形の道管が単独で放射方向に配列する。単穿孔を有する。道管・放射組織間の壁孔は柵状。単列放射組織と広放射組織がみられる。

クヌギ類：*Quercus sp.*（ブナ科：Fagaceae、コナラ亜属クヌギ節：*Lepidobalanus* Sect.Cerris）

環孔材。孔圏道管は1～数列。道管内にチロースがみられる。孔圏外小道管は厚壁、円形、単独で放射方向に配列することによりコナラ類と区別できる。単穿孔を有する。道管・放射組織間の壁孔は柵状。単列放射組織と広放射組織がある。

コナラ類：*Quercus sp.*（ブナ科：Fagaceae、コナラ亜属コナラ節：*Lepidobalanus* Sect Prinus）

環孔材。孔圏道管は1～3列。道管内にチロースがみられる。孔圏外小道管は薄壁で、放射状ないしは火炎状に配列することによりクヌギ類と区別できる。単穿孔を有する。道管・放射組織間の壁孔は柵状。単列放射組織と広放射組織がある。コナラやミズナラが考えられるが両者の植生の分布の性質からコナラであろうと考えられる。

タブノキ：*Persea thunbergii* Kosterm.（クスノキ科:Lauraceae）

散孔材。道管径は中庸。単独ないし2～4個がおもに放射方向に集合。単穿孔を有するがしばしば階段穿孔（階段の数は少ない）がみられる。道管にはチロースがみられ、道管側壁にはらせん肥厚が存在する。道管・放射組織間の壁孔はほとんど円形で、レンズ形は少ない。油細胞がみられる。放射組織は異性で1～3列。

トベラ：*Pittosporum tobira* Aiton（トベラ科：Pittosporaceae）

紋様孔材。小径の道管が斜線状ないしはX字状に配列する。道管は単穿孔を有し、側壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で１～４列。

モチノキ類：*Ilex sp.*（モチノキ科：Aquifoliaceae）

散孔材。道管径がきわめて小さく、放射方向に１～８個が複合する。階段穿孔を有する。道管および木繊維にらせん肥厚がみられる。軸方向柔細胞は散在状ないし短接線状。放射組織は異性で１～６（８）列となり上下縁辺の方形細胞には結晶が存在する。

アワブキ：*Meliosma myriantha* S. et Z.（アワブキ科：Sabiaceae）

散孔材。やや厚壁の道管が単独ないしは２～６個主として放射方向に複合する。周囲柔組織がみられる。単穿孔ないし階段穿孔（階段の数は少ない）を有するがときに網状穿孔がみられる。放射組織は異性で１～４列。放射組織は軸方向に長い。個々の放射柔細胞は大形。

ツバキ：*Camellia japonica* L.（ツバキ科：Theaceae）

散孔材。道管はきわめて小さい。道管は階段穿孔を有し、側壁にはらせん肥厚がみられる。チロースが存在する。道管・放射組織間壁孔は階段状。軸方向柔細胞は多く、短接線状。放射組織は異性で１～３列。放射組織には大形の結晶細胞がみられる。

サカキ：*Cleyera Japonica* Thunb. *pro parte emend.* S. et Z.（ツバキ科：Theaceae）

散孔材。小径の道管が単独ないし２～４個複合して平等に分布する。道管はらせん肥厚ならびに階段穿孔を有し、階段の数は多数。側壁の壁孔は対列状ないし階段状。軸方向柔細胞は多く、散在状。放射組織は異性で単列（ときに２列）。

ヒサカキ：*Eurya japonica* Thunb.（ツバキ科：Theaceae）

散孔材。小径の道管が単独ないしは２～４個複合して平等に分布する。道管はらせん肥厚ならびに階段穿孔を有し、階段は多数。軸方向柔細胞は多く、散在状～短接線状。放射組織は異性で１～４列。

タイミンタチバナ：*Myrsine seguinii* Lev.（ヤブコウジ科：Myrsinaceae）

散孔材。小道管が単独ないし２～３個複合して平等に分布する。木口面では多列の放射組織が目だつ。単穿孔。放射組織は異性でしばしば10列以上。ときに80細胞高に達する。

PLATES

1．調査区全景（東から）

2．SD－21全景（東から）

PL. 2

1．SD－21全景（南から）

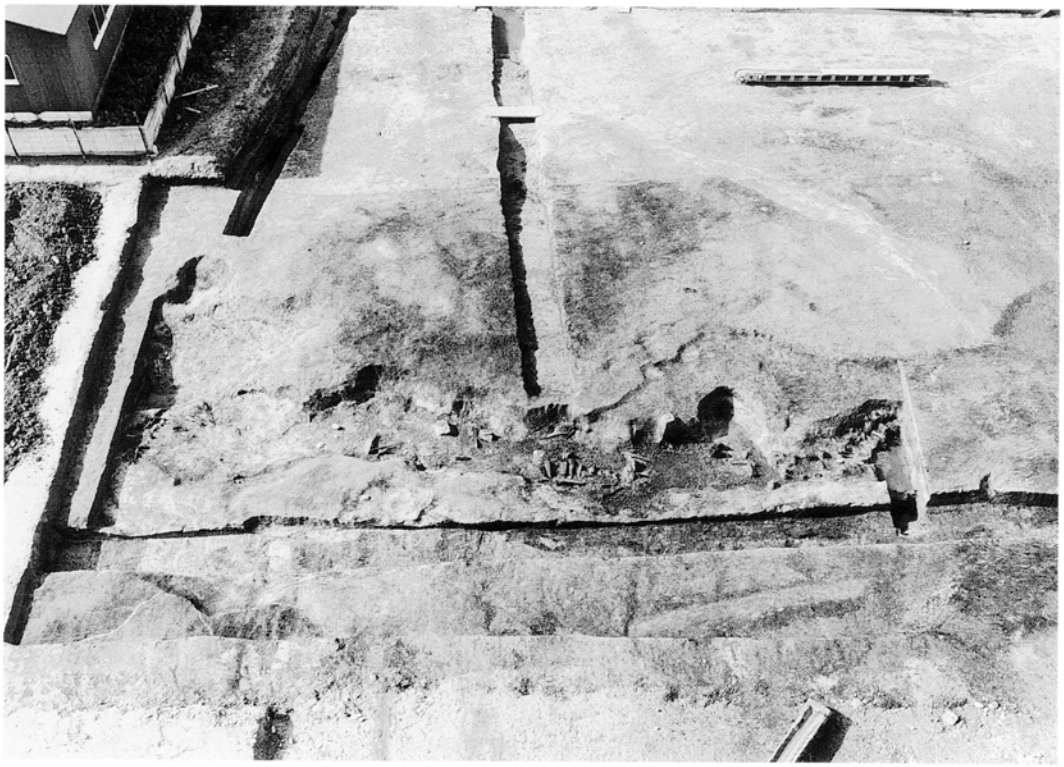
2．1号堰（南西から）

1．2号堰（南西から）

2．SD－21南壁土層断面（北西から）

PL. 4

1．SD－26南壁土層断面（北から）

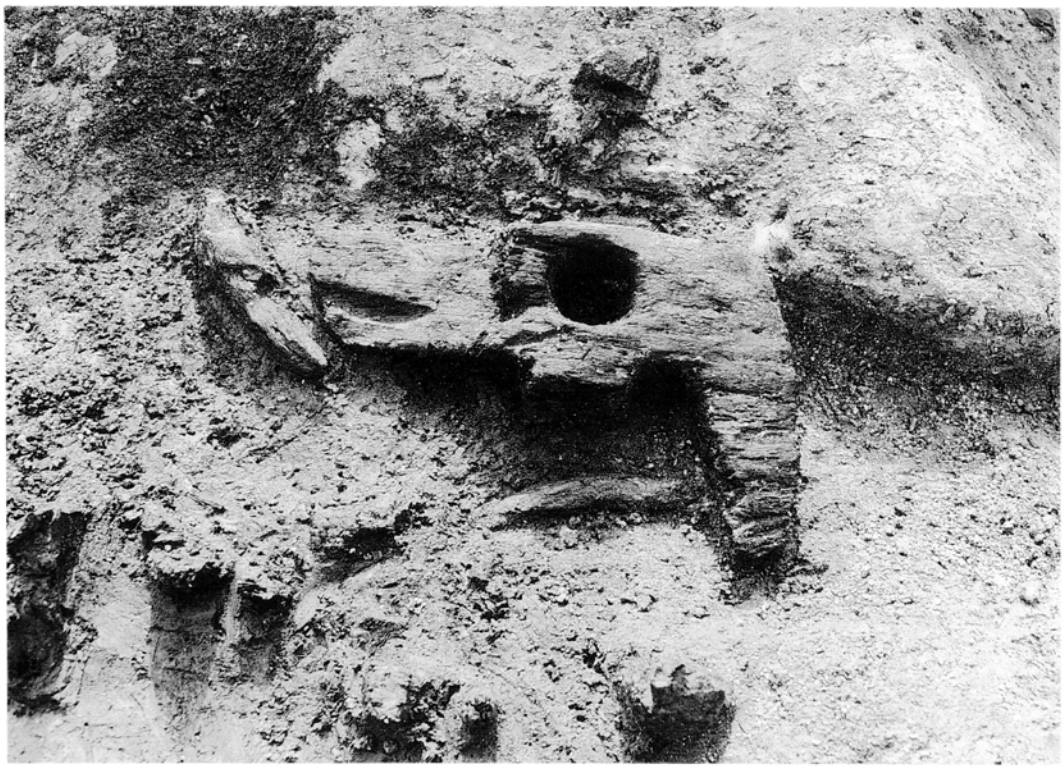


2．SD－23上層南半部（東から）

1．SD－23上層中央部（北西から）

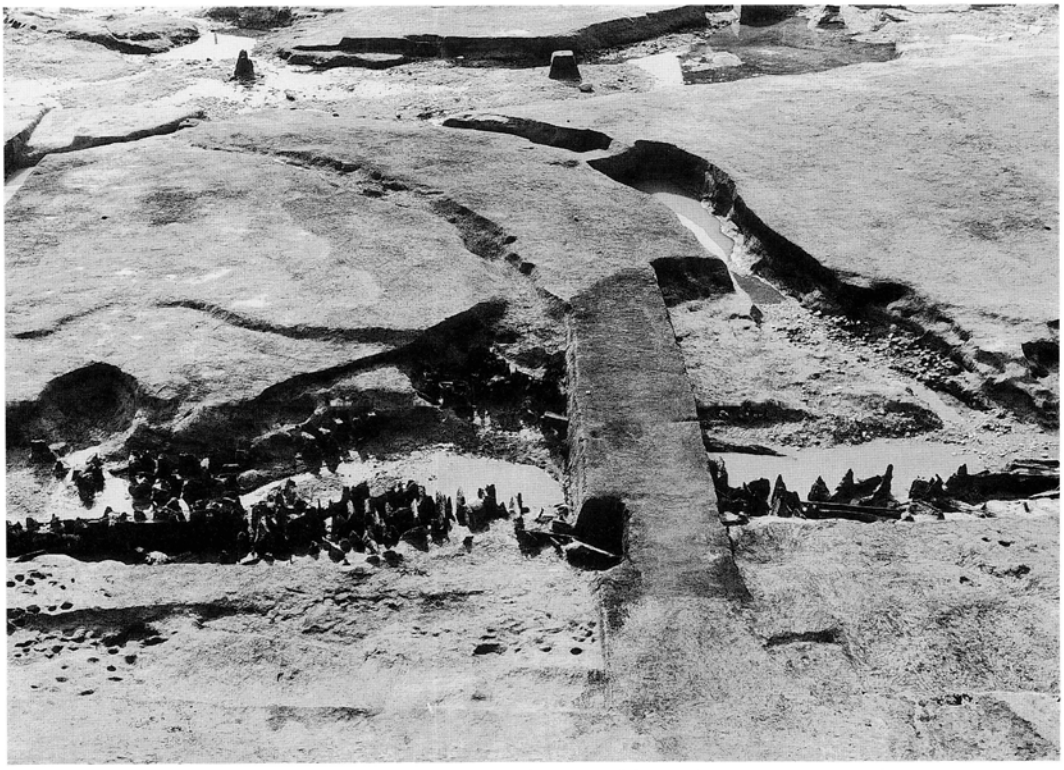
2．3号堰（北から）

PL. 6



1．３号堰木製品出土状況

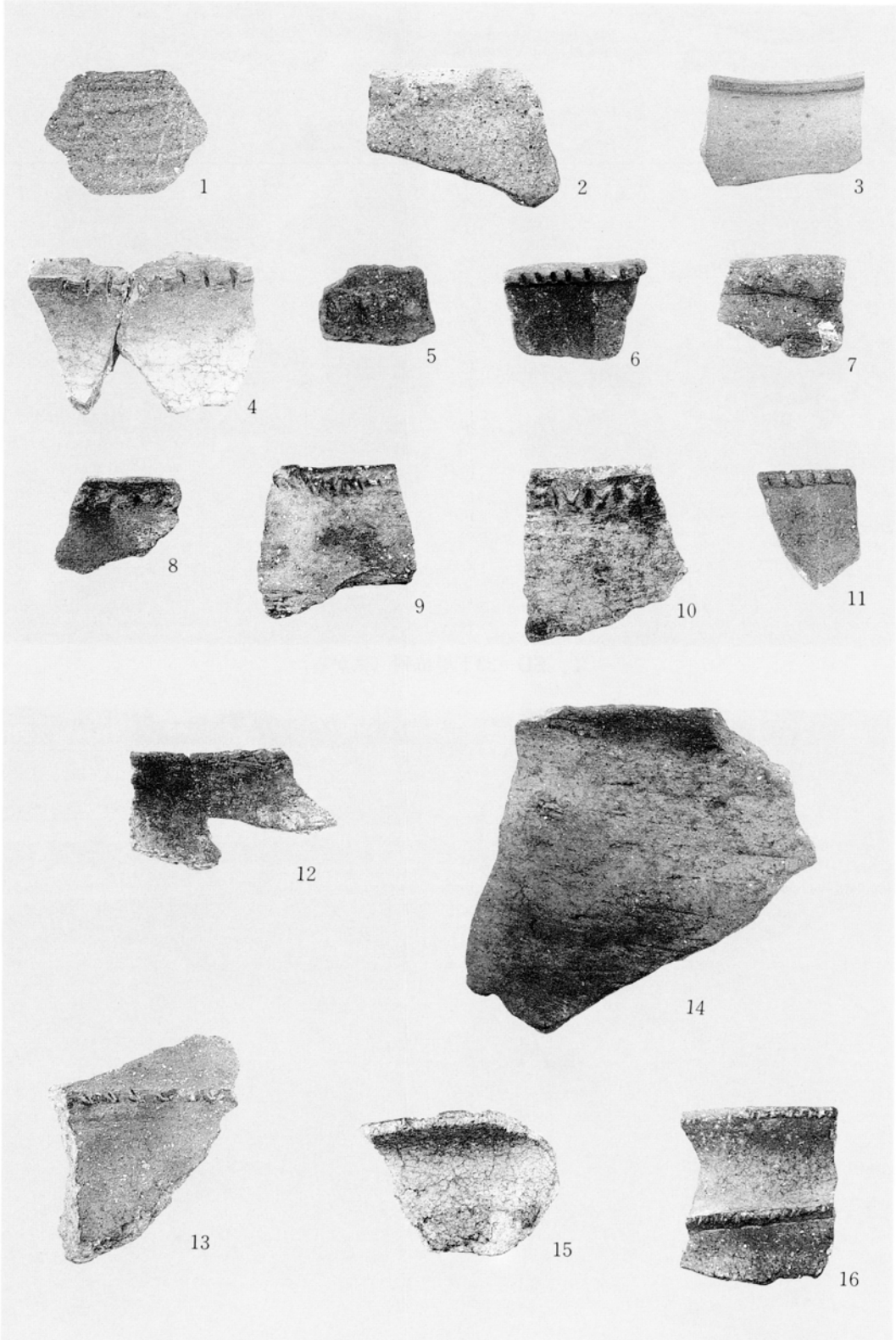
2 .SD－23下層全景（南から）



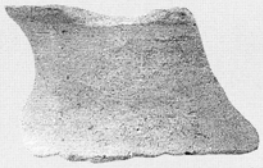
1．SD－23下層杭列（東から）

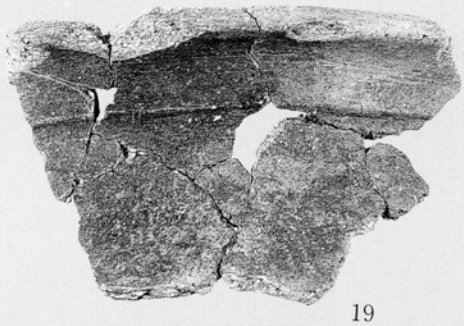
2．SD－23北壁土層断面（南から）

PL. 8



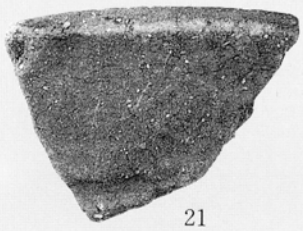
SD－21出土土器・Ⅰ（1/2）

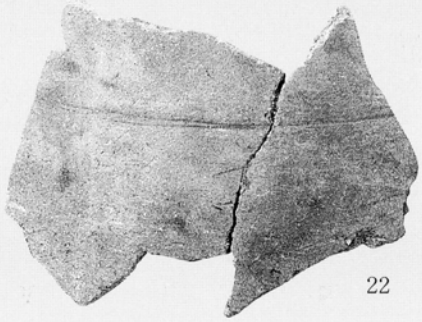

17


19

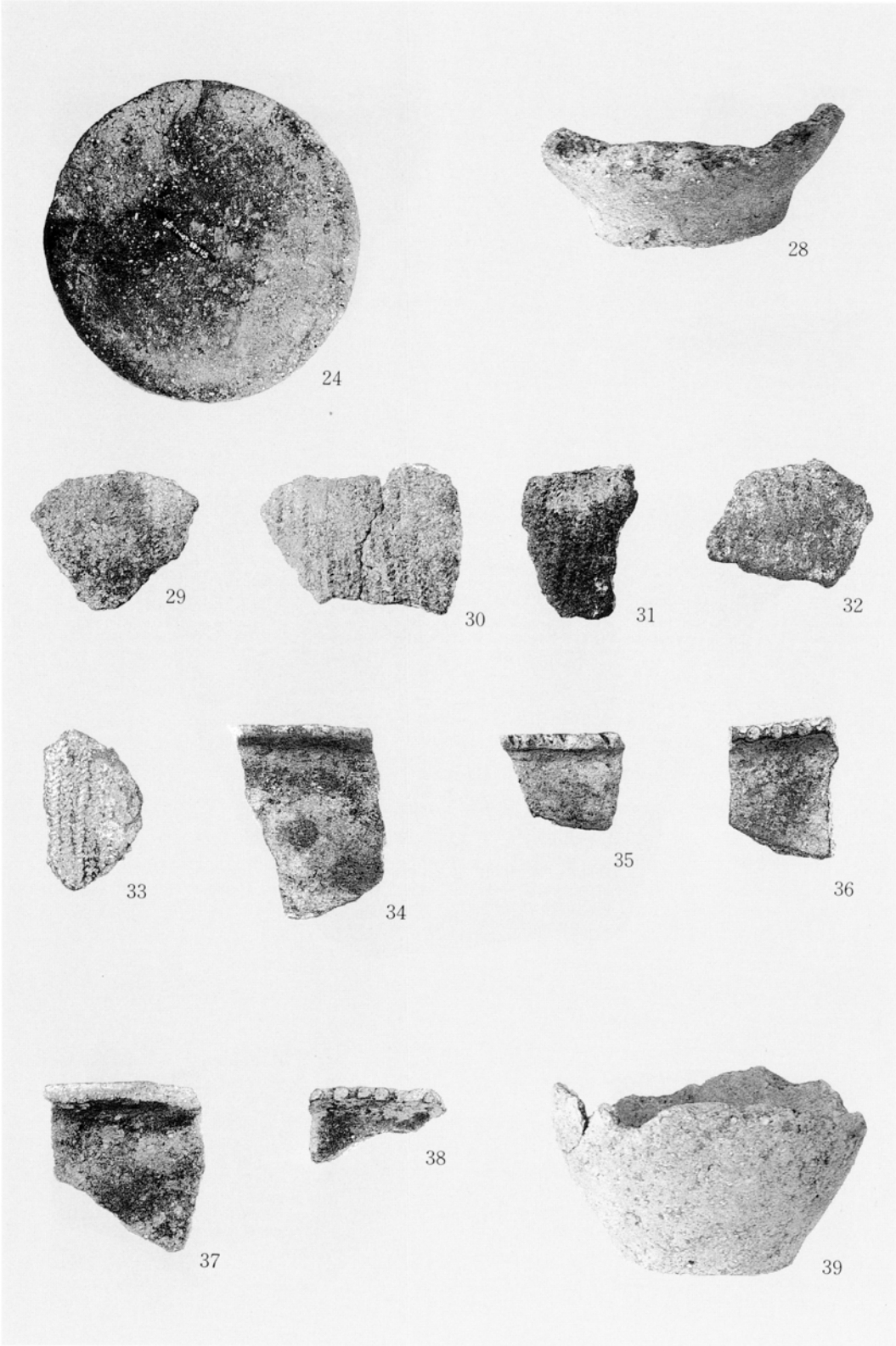
18

20


21

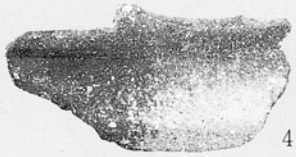

22

SD－21出土土器・II（1/2）

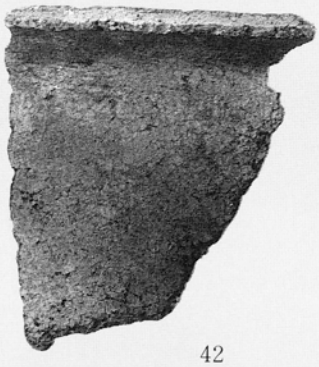


SD－21・24・25出土土器（1/2）

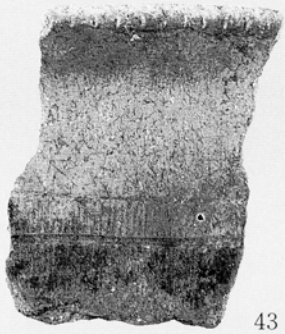
40



41

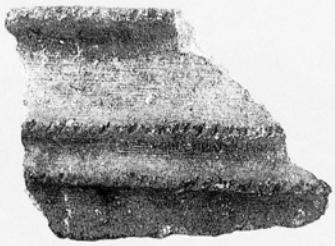


42



43

44



46

45

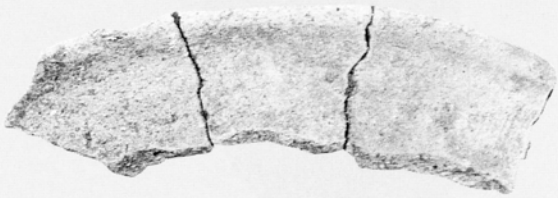
SD－23出土土器・Ⅰ（1/2）

PL.12

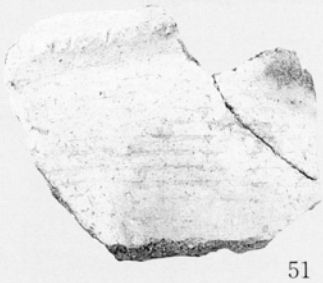
47

48

49



50

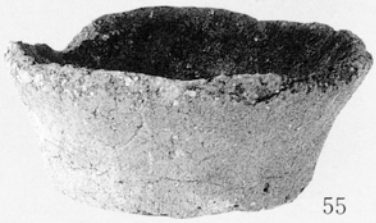


51

52

54

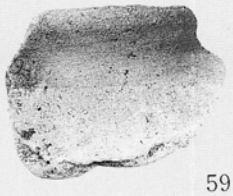
53

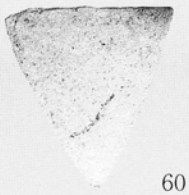


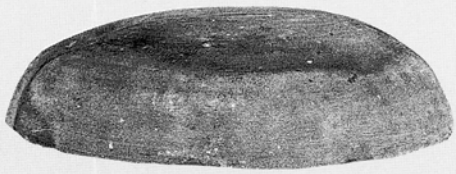
55

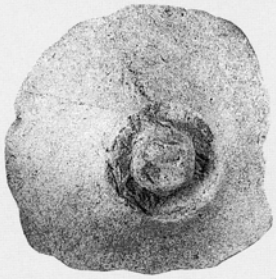
SD－23出土土器・II（1/2）

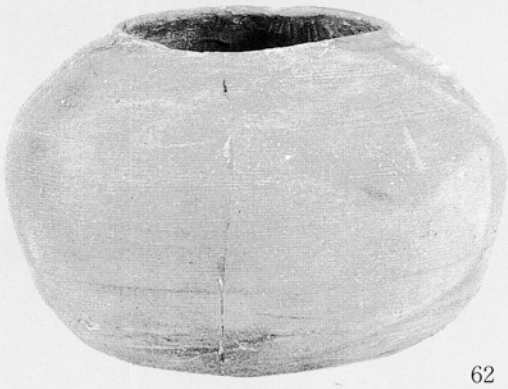
57

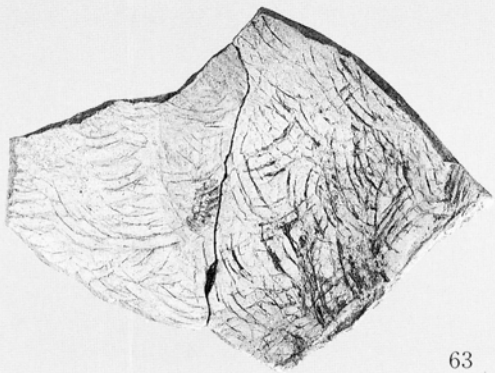

59


60


61


58

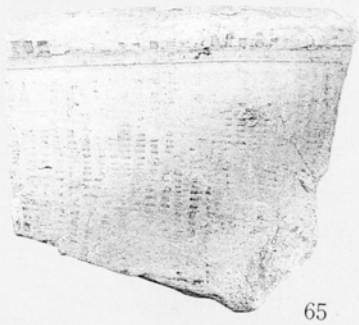

62


63

SD－23出土土器・III（63以外は1/2）

PL.14

64

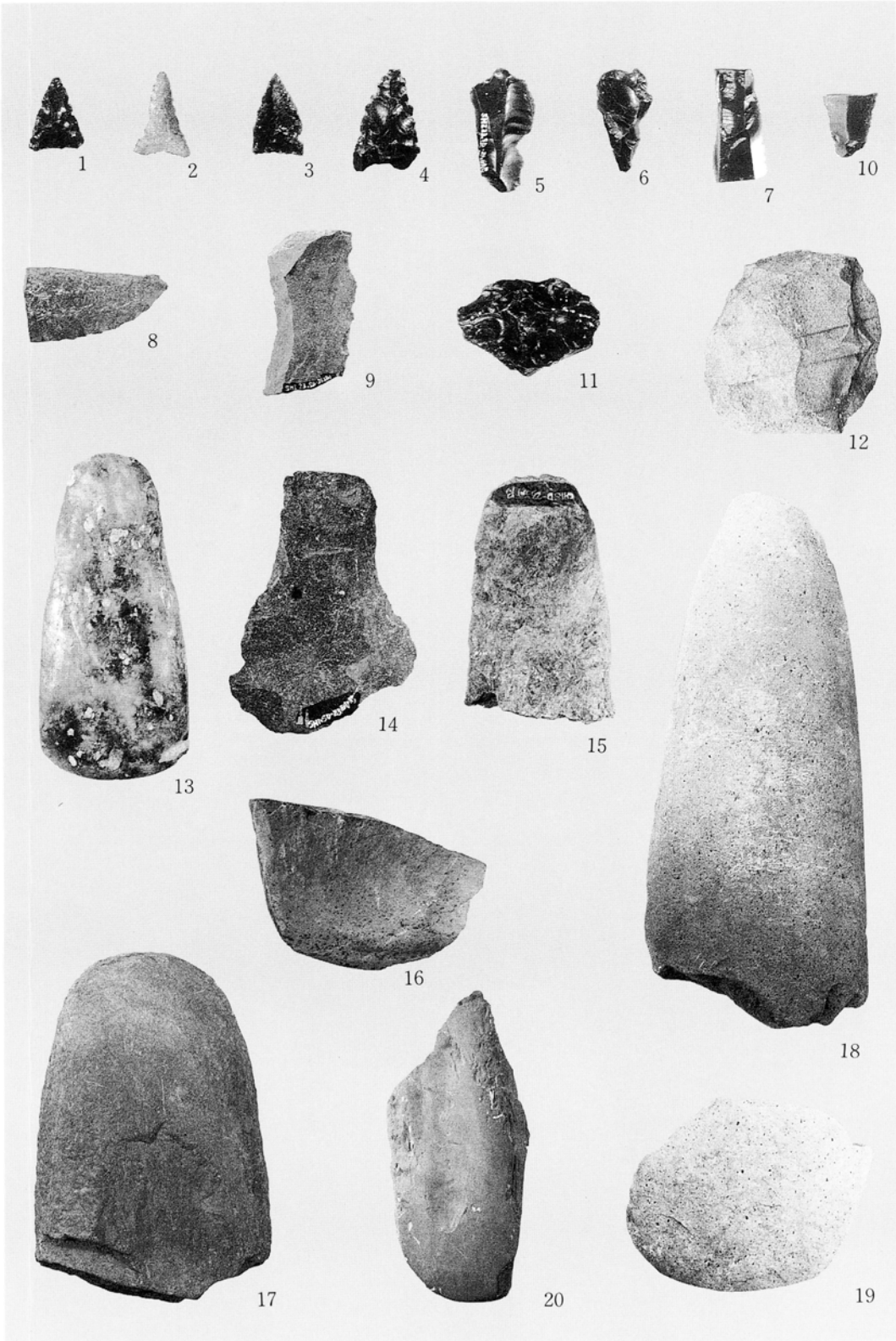


65

66

67

その他の土器（1/2）



出土石器（1/2）

PL.16

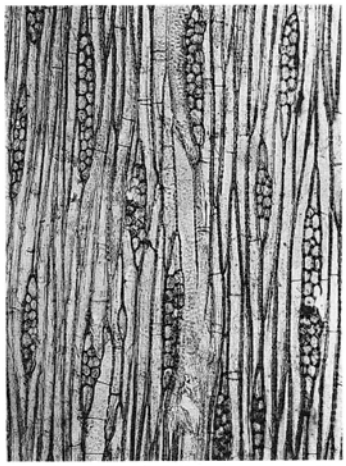
1

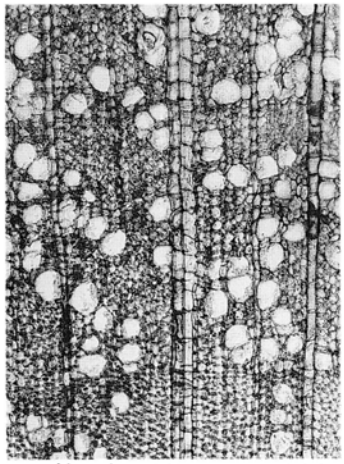
2

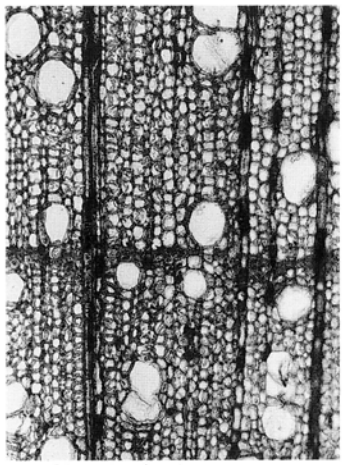
3

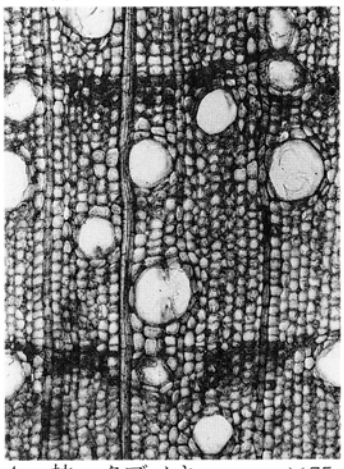
4

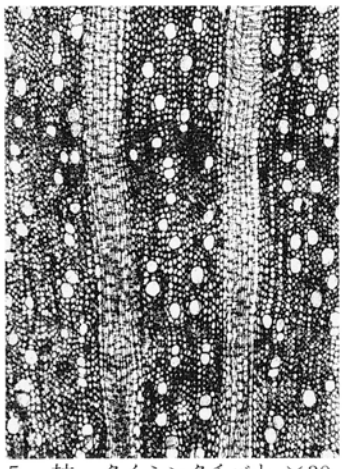
出土木製品（1/3）

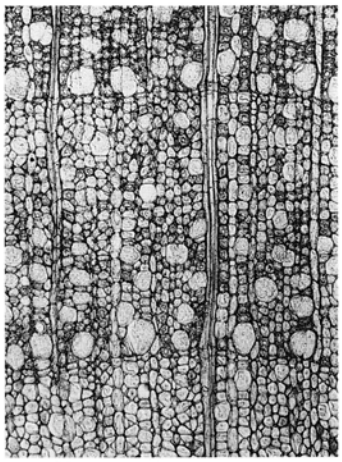

1　杭　タブノキ　×75

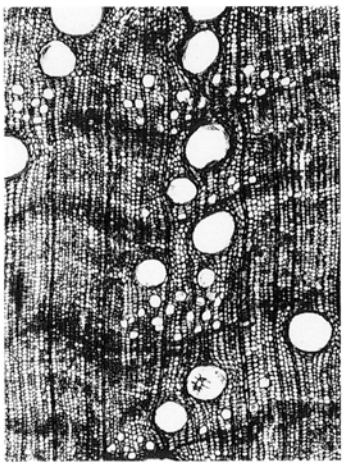

2　杭　トベラ　×75

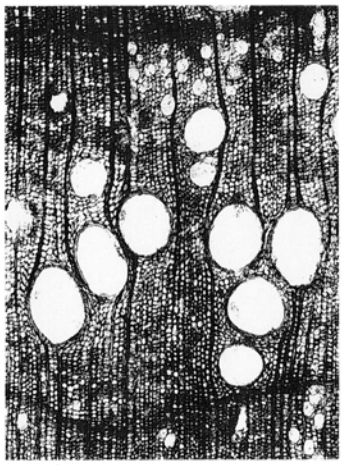

3　杭　タブノキ　×75

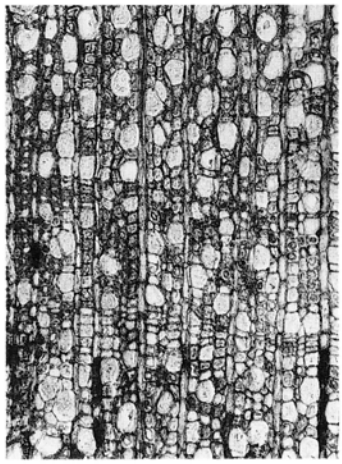

4　杭　タブノキ　×75


5　杭　タイミンタチバナ　×30


6　杭　ツバキ　×75

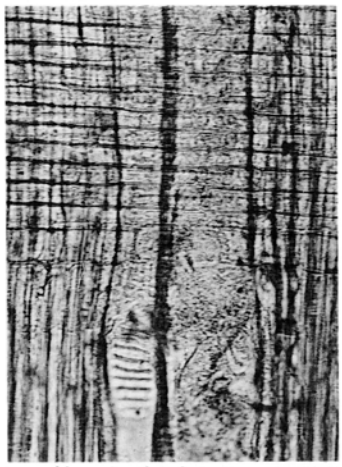

7　板材　シイノキ　×30


8　杭　シイノキ　×30

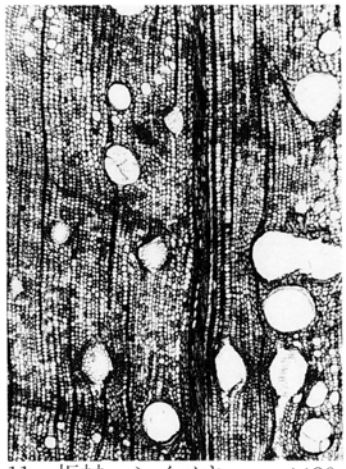

9　杭　サカキ　×75

四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・Ⅰ

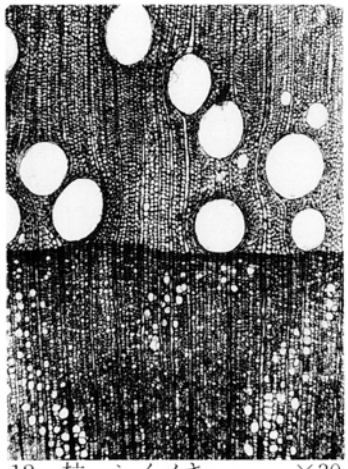
PL.18



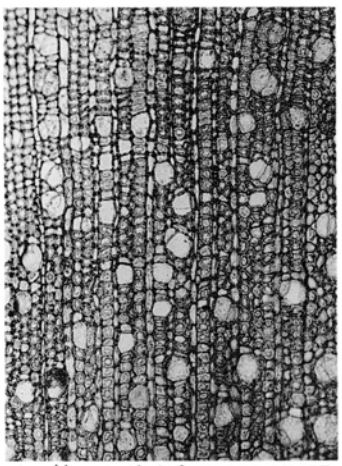
10　杭　タブノキ　×150



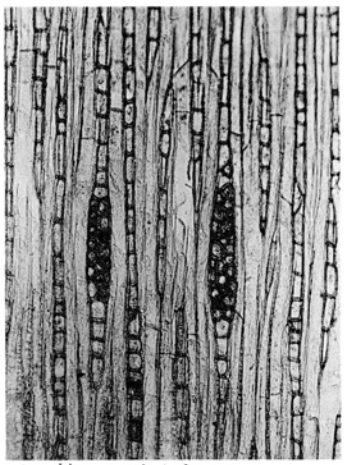
11　板材　シイノキ　×30



12　杭　シイノキ　×30

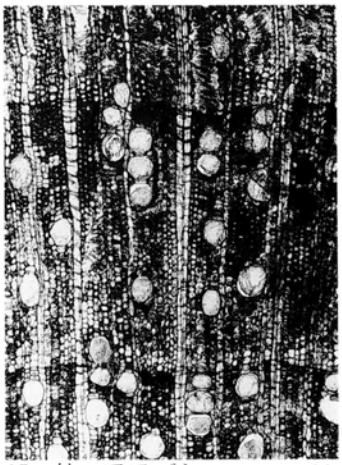


13　杭　ヒサカキ　×75

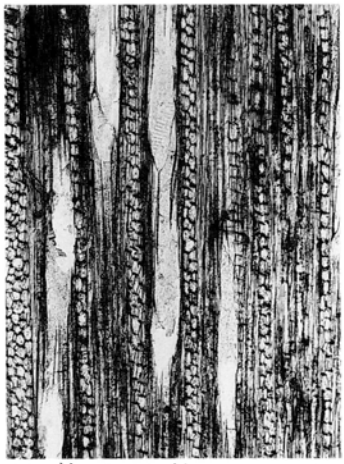


13　杭　ヒサカキ　×75

14　板材　シイノキ　×30



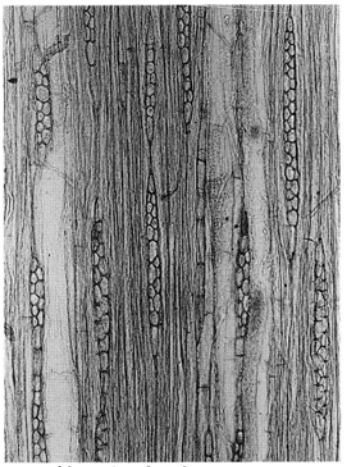
15　杭　アワブキ　×30

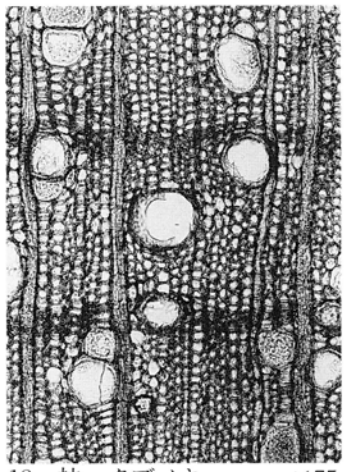


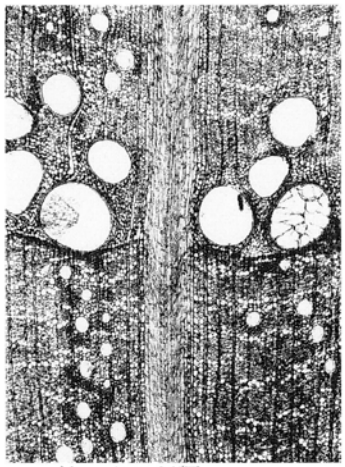
15　杭　アワブキ　×75

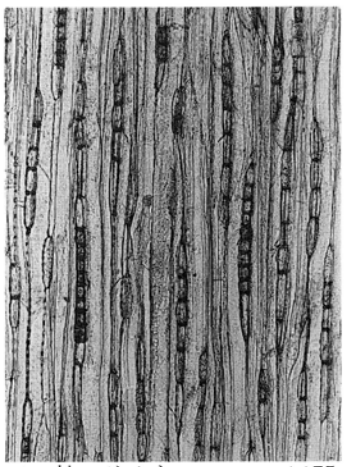
16　杭　ツバキ　×150

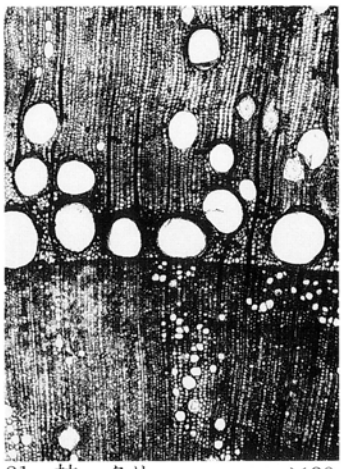
四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・II

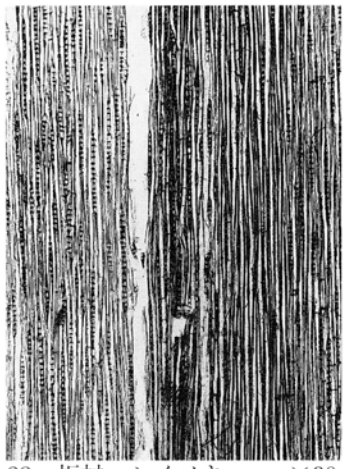

17　杭　タブノキ　×75

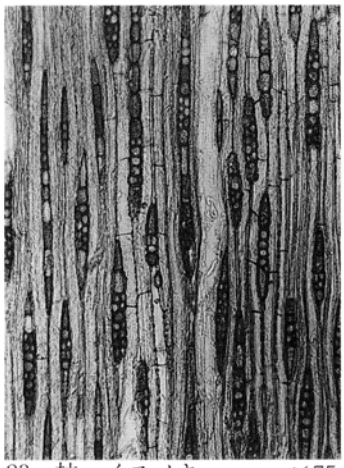

18　杭　タブノキ　×75

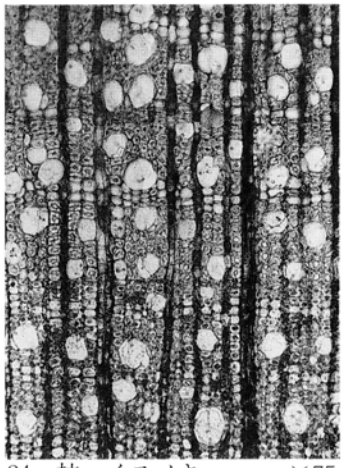

19　杭　クヌギ類　×30

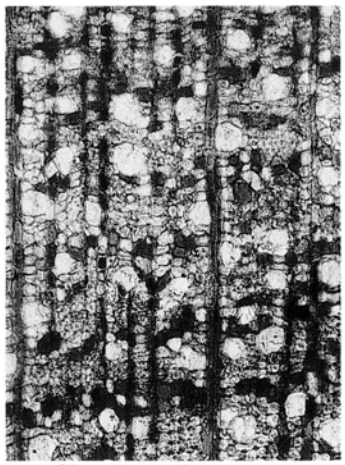

20　杭　サカキ　×75


21　杭　クリ　×30


22　板材　シイノキ　×30

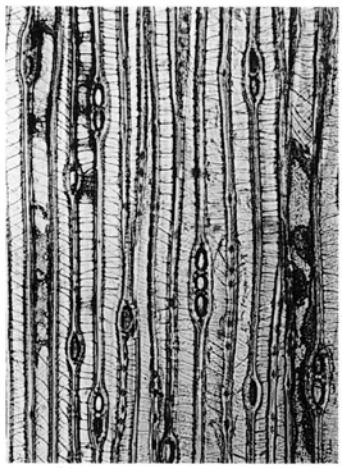

23　杭　イスノキ　×75


24　杭　イスノキ　×75

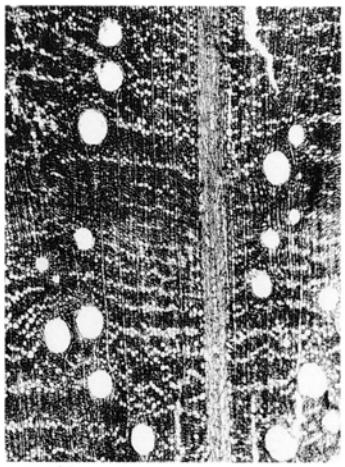

25　杭　イスノキ　×75

四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・III

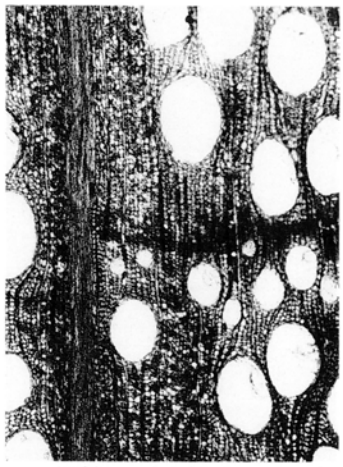
PL.20



27　杭　イヌガヤ　×150

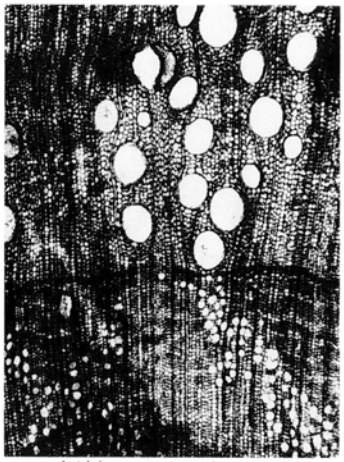


28　杭　カシ　×30

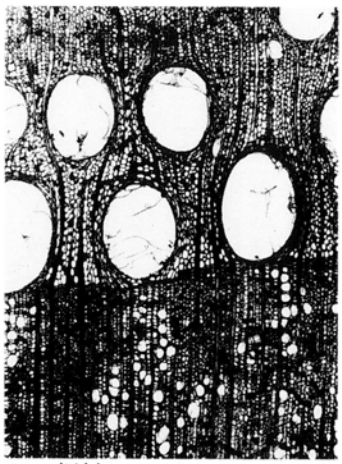


29　板材　カシ　×30

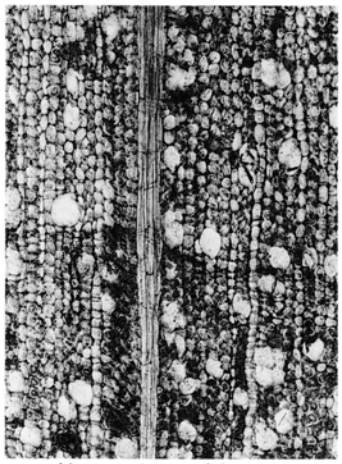
30　えぶり状木製品　カシ　×30



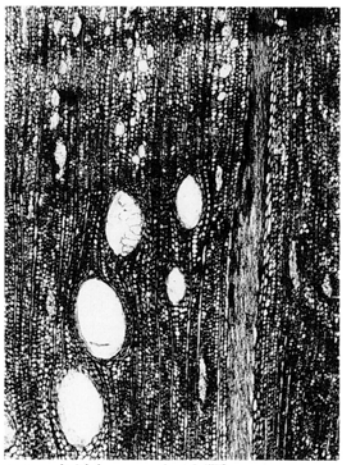
31　板材　シイノキ　×30



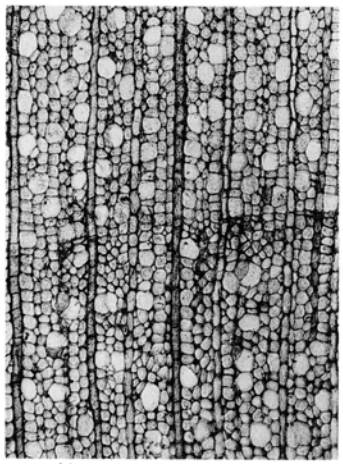
32　板材　クリ　×30



33　杭　モチノキ類　×75



34　板材　コナラ類　×30



35　杭　サカキ　×75

四箇遺跡出土木材の顕微鏡写真・IV

四 箇 遺 跡 群

第23次調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集

1989年 3 月31日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印　刷　株式会社西日本新聞印刷

福岡市中央区天神 1 丁目 4 番 1 号